

十全同窓會會報

(題字…佐藤保十全同窓会会長)

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会会報
編集委員会
印刷/ヨシダ印刷(株)

医学部創立百五十周年記念事業の進捗状況

金沢大学医学部創立百五十周年記念事業実行委員会委員長
金沢大学医薬保健学域医学類長

山 本 健

本会報は、金沢大学医学部創立百五十周年記念式典の直前号です。寄付金の状況、記念モノメント製作、記念式典・講演会・祝賀会の予定、記念誌購入申し込みについて、現段階で明らかになっている事業内容をご報告します。特に、今春めでたく金沢大学医学類に入学された学生諸君と保護者の皆さまには、この号が最初のご案内になります。よろしくご高覧下さい。

一、皆さまからお寄せいただいた寄付金について、ご報告いたします。本年四月二十日現在、寄付金額は八千万円を超えました。この中には個人会員からご寄付いただいた一千万円(二件)、百万円(三百万円(五件)、同窓会支部ならびにクラス会単位でのご寄付いただいた五十万(二百六十万円(三件))が含まれ

ます。八千万円のうち千六百万円は、平成二十年六月から金沢大学医学系教員・病院教員が毎月積み立てて来た寄付金です。ご寄付を賜りました同窓会各位のご協力に対して、心から御礼を申し上げます。

この募金計画は、二〇一五年(平成二十七年)三月までの予定になっております。その時点までの募金額は、すでに着工した事業に四千万円、今後着工する医学類正門周辺整備事業に八千万円、計一億二千万円を目標にしております。万事が多端の折まことに恐縮ですが、まだご寄付をいただいていない関係各位におかれましては、記念事業達成のための募金の趣旨にご賛同くださり、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。本号に再度同封させていただく振込用紙をご利用いただくか、医学部創立百五十周年記

念事業ホームページ(http://www.kikin.kanazawa-u.ac.jp/kikin_med150/)を通じてお申し込みいただければ幸いです。

二、記念事業の目玉の一つである金沢医学館第一期生九名の記念モノメントは、現在高岡市の製造業者のもとで製作中です。九体を一体ごとに製作し、立体的な配置調整は、本学に搬入されてから行われます。記念モノメントの名称については、記念事業実行委員会が侃々諤々の議論が交わされましたが、最終的に加藤聖十全同窓会理事長からご提案いただいた「医の源流 未来への継承」に決定しました。日本語と英語による碑文をモノメントの横に設置しますが、その位置についても塑像制作者の金沢美術工芸大学教授石田陽介先生からアドバイスをいただき、鑑賞者が像の周囲を巡って鑑賞する際の動線を邪魔しない位置に



金沢医学館第一期生(金沢市医師会蔵)

前列向かって左より 藤井貞為、上杉寛二、稲坂謙吉、不破鎖吉
後列向かって左より 三沢敬吉、須賀忠愛、宮北徳、上出達三、藤本純吉

平成二十四年度
金沢大学医学部十全同窓会総会

日時 平成二十四年七月七日(土)
午前九時

場所 医学部記念館
式次第

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、会務報告 理事長
- 一、医薬保健学総合研究科報告 医薬保健学総合研究科長
- 一、医学類報告 医学類長
- 一、医学部創立百五十周年記念事業 金沢大学医学部創立百五十周年記念事業実行委員会委員長
- 一、支部長紹介
- 一、議案審議
 - (一) 平成二十三年度決算
 - (二) 平成二十四年度予算(案)
 - (三) 役員改選
 - (四) その他
- 一、閉会の辞

記念式典 十時

記念講演会 十時四十分

京都大学大学院医学研究科 特任教授 十全講堂 十全講堂

本席 佑氏

「遺伝子が語る生命像」

東京大学名誉教授 建築家 安藤 忠雄氏

「これからの日本のあり方について」

モノメント除幕式 十三時

祝賀会 十三時三十分 医学類教育棟中庭

設置する予定です。およそ百四十年前の湿板写真（現像は島田逸山写真場と推定される）から新たに創造される立体像がどのような出来映えになるか、楽しみに待ちたいと思います。

三、七月七日（土）は、午前九時から医学部記念館にて十全同窓会総会と十全医学会総会が開催されます。続いて午前十時から医学部十全講堂にて記念式典と特別講演、十三時から医学部F棟前にて記念モノUMENTの除幕式、十三時半から医学部教育棟と中庭にて祝賀会を行います。記念式典当日は、前田家第十八代当主 前田利祐様がご出席下さる予定です。金沢の学術・文化の発展は藩政時代から前田家の文教政策と分かちがたく結びついており、その意味でも記念式典・記念モノUMENTの除幕式にご出席いただけることはたいへんありがたいと思います。また、除幕式には金沢医学館第一期生のご子孫にもご出席いただく予定です。

除幕式に続き、祝賀会を開催いたします。会場は、教育棟中庭およびロビー。参加費は無料です。梅雨明け前の暑い時期でありますことから、天候にかかわらず、中庭の半分ほどをテントで覆う予定です。中庭には現在、宝町最古の建物となつた旧書庫があり、その周囲には緑地

と歩道、ベンチが整備されています。当日参加者全員に贈呈する記念品も準備中です。皆様にはこそぞつてご参加いただければ幸いです。同封いたします調査返信用葉書にて、式典・祝賀会へのご出欠のご予定をお知らせ下さい。

四、金沢大学医学部創立百五十周年記念誌は、記念式典・記念講演と祝賀会の記録を含めるために、本年十月刊行を予定しています。特に現役の医学部学生の皆さんと保護者の皆さまには、本学医学部の歴史と業績をご理解いただくための、第一級の史料です。前号に引き続き、本号にも事前購入申込書を同封いたします。事前申し込みには特別価格とさらに学生割引を設定しておりますので、是非事前購入申し込みを賜りますようお願い申し上げます。また、学内各研究分野のために、公費（奨学寄付金）による購入を可能にいたしました。

記念すべき金沢大学医学部創立百五十周年記念式典・講演会・祝賀会が盛会となりますよう、十全同窓会関係者各位、医学系ならびに附属病院職員、医学部学生と保護者各位に、お力添えと当日のご参加とをお願い申し上げます。

名簿改訂についてのお願ひ

編集委員会では、各卒業年度からの協力者を中心として複数の方に住所変更の校正作業をお願いし、遺漏のないように努力いたします。何分多数、多岐に亘る作業ですので御協力の程宜しくお願い致します。なお、改訂版の発送は十二月上旬を予定致しております。

十全同窓会名簿編集委員長 加藤 聖

卒業生に贈る言葉

前医学部長 井 関 尚 一



皆さん、ご卒業おめでとうございませう。昨年の卒業式が東日本大震災からわずか十日後だったことを考えると、皆さんは平穩無事な状況のもとで学業を終えて新生活を始めることができるのを喜ばねばなりません。この一年間に活動した被災地の医師たち、あるいは支援に出向いた医師たちの多くが語るところでは、当初は阪神大震災などの記憶から、重傷者が大量に出て治療に追われることを予想していたのが、現実には人的な被害の大部分は津波による死者や行方不明者であつて医療の対象になりませんでした。問題はむしろ日頃から病気のある人が被災により診療を受けられなくなったり、医療機関自体が甚大なダメージを受けて日常の医療が遂行できなくなったことなど、医療の需要の増大よりは医療の供給の喪失にあつたということです。このことは医療の役割が日常のなかで必要欠くべからざるものであるという当たり前の事実を示したとも言えますが、皆さんには今回の災害を機会に、充実した医療設備や多数のスタッフが仮になかったとしたとき、医師としての自分が裸一貫で何ができるかを

考えてみるのも興味深いと思います。現代の医師が江戸時代にタイムスリップしたときに何ができるかというテレビドラマがありました。これは発展途上国に行つたとき、無医村に行つたとき、大災害に見舞われたときなどに類似した状況です。場合によっては治療技術よりも衛生的な知識の方が役立つことがあるかもしれません。医師としての自分のコアになる知識、技術、発想を充実させることにより、いかなる状況でも自分の役割を果たせるようになってください。

皆さんはこれから医師という専門集団に属することになります。専門集団は、professionと呼ばれる集団の原型は、近代西洋における医師、聖職者および法律家でありました。彼らが専門家たり得ている理由は、まず彼らが扱う対象がそれぞれ人間の身体、精神および権利という、かけがえのない重要なものであり、また彼らが一般の人が容易になしえない長く苦しい修行の末に、一般の人が容易に持ち得ない知識と技量と人間性を得たと見なされるからです。医師という専門家は、人の健康、病、死に関する判断を独占するという特権を社会から与えられています。この特権に対する対価として、この集団は自らの質を保証することを、社会に対して宣言（profession）とを、

医師の集団の質を保証することは、原理的にはどの医療機関でどの医師にかかっても同じ治療を受けられることを意味します。このために、個々の医師は常に腕をみがき、最新の医学知識と技術を身につけて診療を行なわねばなりません。また後輩に対して自らの医学知識と技術を伝えねばなりません。さらに、医学知識と技術の水準そのものを常に発展させていかねばなりません。すなわち診療、教育、研究の三者が、医師を専門家たらしめている源です。卒業された皆さんには、診療の面で腕を上げていただきたいのはもちろんですが、本来医師とは教育と研究も行なう存在であることを覚えておいてください。

これまで皆さんは学生であつたわけですが、今後も医師として生涯にわたって学び続ける必要があります。それは多くの点で学生時代の勉強とは異なるものであるゆえに、いわゆる学生気質というものに決別を告げる必要があります。第一には、六十点の医師になるということことです。みなさんは大学入試のときは、他人よりも少しでも多く勉強して、他人よりも一点でも良い点を取ろうとしたはずですが、ところが大学に入ってから、多くの人は目の前の試験に六十点以上をとってこなししていくことで満足してきたのではないのでしょうか。皆さんはこれから医師としての修行をするにあたり、そのような六十点でいいという発想を捨て去っていただきたい。言うまでもなく、患者さんは六十点の医師ではなくて、百点の医師に診てもらいたいのです。また学生時代には担当教授の温情により、常に再試験というものがありませんが、

これからは再試験はないと思った方がよい。自らの診断や治療の結果は取り返しのつかないものであり得るからです。さらにまた、医師としての皆さんが直面する問題というのは、学生時代の試験問題のように正答が用意されているものではありません。自分の専門知識と技術のみならず、自分が得た教養、人間性のすべてを動員して自ら解決せねばならない問題です。そのためには100%の力が要求されます。常に全力投球する、そして生涯にわたって自分を向上させ続ける、それが専門家というものです。以上、卒業していく皆さんの未来が光り輝くものであることを祈って、私のお祝いの言葉といたします。



会費納入のお願い

同封の払込用紙をご利用下さい。

春の叙勲記事は

秋号に掲載となります。

抱負——三期目の理事・副学長を拜命して——

古川 俣



中村信一 学長
六年任期の最後の二年を勤める理事・副学長として、前期同様財務・病院担当を仰せつかりました。金沢大学基金、同窓会のマネジメントも引き続き担当します。

初にご報告します。病棟から始まって中央診療棟、新外来診療棟、そして本年三月一部移転が完了した第一期臨床研究棟（正確には総合研究棟Ⅰ・医学系）まで含むと、大きく四期を経過したことになります。他にも図書館の医学系分館の平成二十五年四月リニューアル開館へ向けた工事が進んでいます。本年度、第二期臨床研究棟の予算化に成功したことにより、工事は本年七月着工、完成は平成二十五年八月が見込まれています。したがって構内整備は、その移転が終了してから旧臨床棟や中診療棟の残りの取り壊しのあとになります。実際、構内東側駐車場の一期、二期工事が終了したのち立体駐車場の二期工事が始まり、構内西側駐車場の整備が完了するのは平成二十八年度末という計画です。新病棟工事開始から約十七年目によりやく再開発事業にピリオドが打たれるわけです。

さて、病院担当理事としてこの後二年間に取り組みべき病院マネジメントの重点課題と取り組みについて紹介します。組織・運営面で強調したいことは、医

療の高度化・複雑化に伴い医療従事者の高度な専門性の追求と日々の自己研鑽は欠かせません。地域医療最後の砦である大学病院の機能を維持するためには医療従事者の有機的な連携を図り、チーム医療を推進しなければなりません。医療従事者の増員、適正配置と定員の集中管理化、処遇改善に取り組むつもりです。

病院機能強化のために最大の課題は、臨床研究中核病院認定取得に向けた努力であります。全国十五施設に設置される中核病院の指定を受けるか否かは本院の命運に係る大事です。昨年度までにすでに五施設が選定され、この先二年間で残る十施設を巡る激しい競争が予想されます。大学への最後の御奉公のつもりで最善を尽くすつもりです。本年四月、名古屋大学が中心となる中部先端医療開発円環コンソーシアムに加盟したのもその理由からです。早期・探索的臨床試験について拠点からの支援を受けつつ、本学の橋渡し研究（トランスレーショナルリサーチ）を充実させ、先進医療の提供につなげるのが目的です。経営面でも、診療報酬請求の適正化、二十四年度診療報酬改定に伴う新規施設基準を取得し、レセプトの精度向上による請求漏れ防止対策、査定減対策の強化を図るつもりです。

その他、夜間保育室の早期設置を目指して頑張ります。十全同窓会会員皆様の温かいご支援とご協力を心からお願い申し上げます。

医薬保健研究域・学域長就任ご挨拶

井関 尚一



この度、ご推挙を得て医薬保健研究域・学域長に就任いたしました。これまで

で医学部長として医学生のための実務的な仕事をしてきましたが、今後は医薬保健という部局の管理者的立場になります。同窓会員の皆様には、二〇〇一年の大学院重点化で講座の名前が複雑怪奇になったこともまだ記憶に新しいのに、その重点化を事実上ご破算にする形で四年前から金沢大学が三学域制となり、伝統ある医学部の名が消えようとしていることに戸惑いを感じ

られる向きも多いと拝察いたします。大方の医学系現職教員も同じ思いです。医薬、保健それぞれについて学校組織としての学域・学類と、教員組織としての研究域・学系の呼称があつて非常に分かりにくく、意思決定はそれぞれの学類・学系の議のあとに医薬保健学域・研究域の議を経てようやく大学本部に上がります。これに加えてがん進展制御研究所を含む大学院組織の意思決定があり、同じ教員が何度も各段階の会議に出席しなくてはなりません。およそ効率化とは逆の仕組みになっています。ちなみに新制度では講座というものが存在しない建前になっており、不便なのでやむを得ず大学

院の分野名を併用しています。

医薬保健の三つの系の関係では、それぞれの伝統と自主性を尊重して調整するしかありませんから、域のなかでの医学系の発言力は相対的に小さくなります。一方、大学全体のシステムは法人化以降、

トップダウンとなり、部局としての医薬保健研究域の発言力もかつての医学部のそれよりも小さくなりました。先日の学位記伝達式において、部局再編前の入学である医学部卒業生の学位記のみに医学部長が卒業を認定したと書いてあり、他の学類卒業生では学長の名前になっていたことは、部局に卒業認定権もなくなつたことを象徴していました。

大学法人との関係では、域長の役割は国や法人の意思と、それぞれの系や教員の意思との間を取り持つことなのでしょう。現在の国立大学では、国が運営費交付金を減額する一方で競争的資金により特定の事業を募集し、大学側が必死になつ

て応募するということの繰り返しです。これはすべての大学や講座・教員に莫大な時間と労力を費やせただうえて、結果としてはごく少数の大学や講座・教員に選択と集中を行い、それに漏れた大多数の大学や講座・教員は疲弊していくというシステムです。これが日本の研究にどんな効果を及ぼしたかは、トムソン・ロイター社の統計において国立大学法人化を境とする二〇〇〇年代中頃から、世界の中で日本の研究業績だけが絶対数でも下降し続けている事実が物語っています。ちなみに、日本の医学部における臨床研究業績の下降は、法人化に加えて卒後研修必修化の結果であることは明らかでしょう。

私は現在のシステムのもとで責任ある立場を与えられた以上はその義務を果たすつもりですが、選択と集中とは無関係に自らのモチベーションで教育と研究に励んでいる多数の講座・教員のことを常に念頭に置いて発言したいと思っています。

医薬保健学総合研究科長・医学系長就任ご挨拶

山本 博



此の度、医薬保健研究域、附属病院、がん進展制御研究所、学際科学実験センターに所属す

る多数の方々のご推挙ご支持により、医薬保健学総合研究科長と医学系長を拝命

するところとなりました。

学域・研究域への再編から五年目を迎える平成二十四年度、大学院研究科は博士課程薬学専攻の参加を得、医学系研究科から医薬保健学総合研究科へと変わります。これにより、医薬保健学域という学士教育組織、医薬保健研究域という教員組織、医薬保健学総合研究科という大

学院教育組織の一元化が成り、医学、薬学、保健学分野が一体となった教育研究基盤が整うこととなります。大学院生は本学の学術研究と将来の重要な担い手であり、まず、医薬保健学総合研究科の円滑な船出と運営に尽力したいと存じます。

研究科長が医学系から選出された場合、内規により、研究科長は医学系長を兼ねることになります。二年間の任期は医学類と薬学類の学年進行とも重なりますが、研究域・系と学域・学類制のさらなる定着を支え、各種国際化事業への参画、基礎研究のさらなる充実と橋渡し研

究への展開、臨床研究開発に係る病院との連携、コンプライアンス遵守の徹底など研究科と系にとつて重要と考えられる諸課題に関係各方面のご協力を仰ぎつつ取り組んで参りたいと存じます。

甚だ微力ですが、母校の発展のため献身して参る所存でございますので、同窓の諸兄姉には何卒温かいご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。



医学類長就任へ挨拶

山本 健



この度、医学類長（兼医学部長）にご推挙いただきしました。

私は金沢大学医学部医学科を昭和四十八年（一九七三）に卒業後、医学部附属病院での診療と、医学科学生の教育に三十九年間携わって来ました。退任までの二年間、医学部へのご恩返しのため、務めさせていただきます。

一、医学類学生の教育システムに関して、五年次の臨床実習開始までにクリアすべき目標として、共用試験（CBT）と客観的臨床能力評価試験（OSCE）が実施されています。CBTとOSCEを受験する学生からは、両試験共に準備期間がほしいとの希望があり、井関前学類長と教育委員会のご努力で、平成二十四年度からはカリキュラム進行を前倒しし、臨床系の臨床実習前講義は四年次秋学期に終了することになります。

二、六年次春から夏にかけては、学生が自主的に選択する臨床系あるいは基礎系講座で、医療の実技や研究の実際を体験できるクリニカル・クラークシッブ（クリニック）が実施されますが、多忙な臨床系教員が学生を指導する負担は大きく、かつクリニックの修了時に学生が達成すべき目標が設定されてい

せん。以下に述べるグローバル人材養成ともからんで、英語論文の読み方など、具体的な到達目標を検討したく思います。

三、医育機関に課せられた使命の一つは、良質な医師の養成にあることは明らかです。国家試験の合格率・合格者数は、学生教育の内容を反映する無視できない指標です。平成二十三年度の医師国家試験の結果は別項で報告されるとおりですが、教員側がさらに改善できる点を検討したいと思います。具体的には、「医師国家試験出題基準」の各分野を、本学のカリキュラムが過不足なく網羅しているかという点ですが、その評価のためには、特に臨床系の教員各位が担当されている授業内容を把握することが必要と考えます。

四、厚労省の下部委員会である「医師国家試験改善検討部会」が平成二十三年六月に答申した内容は、今後の医師国家試験の方向を知る上で重要です。具体的には、

A. 出題基準について…「医学教育モデル・コア・カリキュラムの到達目標との整合を図る」こと、

B. 個々の出題内容について…「医学生が臨床実習に主体的に取り組んだ場合に経験可能な事項や、卒後臨床研修で実際に対応が求められる状況を想定し、症候から優先順位を考慮

しつつ鑑別診断を進めていくという臨床医の思考過程に沿った問題を作成するよう努める」とされており、BSLと臨床系クリニックの内容充実が、医師国家試験の合格率向上に重要なことは明らかです。

五、医学部の研究マインドを育てる「MRD研究者育成コース」（MRTPログラム）は、既に基本的な計画が出来上がっており、実現を目指します。

六、文科省は平成二十四年度に「グローバル人材育成推進事業」を公募してお

金沢大学附属病院、病院長四期目のスタートにあたって

富田 勝郎



皆様方の温かいご支援により金沢大学附属病院の病院長の四期目を出発させていただきます。

になりました。熱い信任を受け本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これまでの一期目、二期目、三期目の成果を基に選出いただいたものと理解し、過去一貫して主張してまいりました基本理念で進んでいきたいと思っています。その理念とは、「医は仁術」を基本に人間性豊かな臨床を実践していくこと、北陸圏の医療をリードしていく役目をしっかり果たしていくこと、です。

従来より大学病院の使命として、①一般診療に最高・最善の医療を実践してい

り、本学では学類単位の事業計画によって応募する方針です。医学類として実施可能な、また利点のある事業計画を立案する必要がある、各位のお力添えをお願い申し上げます。

七、最後になりましたが、本年七月七日の「金沢大学医学部創立百五十周年祝賀会」は、医学類が主体となつて開催されます。十全同窓会会員の多数のご参加をお願い申し上げ、就任のご挨拶といたします。

く、②高度先進医療の実践・開発、③最後の皆「医療への挑戦」を掲げてきました。今後さらに④予防的先進医療、⑤地域医療支援、も準使命に加え努力していきたいと思っています。この延長線上の大仕事として、翌年春の完成を目指した「金大病院CPDセンター」の立ち上げがあります。これは、医師・看護師不足に集約される地域医療問題を解決するために、医療人の生涯教育・技能向上をはかることを目的としたものです。国の地域医療再生計画の一つとして、県の支援のもと金大附属病院が中心となつて行なうものですが、目下、石川県や地域医療支援センターと連携しつつ大学病院外来棟の四階に開設工事をするまでにこぎつきました。ここが最新の医療情報の発信地として講演、研修会、専

門的医療技術の訓練などを通じた交流の場となり、また医師・患者が遠隔地に居ながら、テレビ診療支援、カンファレンス参加などを可能にするものを目指しています。

さらに四期目の間に金大病院正面敷地の整備も進めるつもりです。しかし旧臨床研究棟の取り壊しには新臨床研究棟（医学部）が完成し旧医局の引っ越しが全て終了するのを待たねばなりません。とはいえ手が付けられる所から、ということで目下、外来立体駐車場の建設から始めています。

一方、一八六二年（文久二年）加賀藩

就任挨拶

金沢医科大学医学部 総合内科学教授に就任 小林淳二教授（昭和五十九年卒業）



平成二十四
年四月一日付
で、金沢医
科大学医学部
総合内科学教
授を拝命致し
ました。

私は昭和五十九年三月金沢大学医学部を卒業後ただちに千葉大学第二内科に入局、内科研修を行った後、脂質異常症、動脈硬化症の研究を行いました。米国UCLAとNIHに留学の機会を戴き、脂質代謝の重要な酵素であるリポ蛋白リパーゼに関する研究を行いました。帰国後、千葉大学保健管理センター兼第二内

科の種痘所に源流を発した金沢大学医学部は二〇一二年の今年、創立百五十周年を迎えます。これは将に金大附属病院の歴史そのものでもあります。この機会に皆さんの叡智を集めて、金大病院の歴史と伝統に誇りが感じられるよう、そして未来に向っていつそう希望と信頼の拠点であり続けるよう、正面の佇まいの青写真を描いておきたい、と願っています。古川病院理事、新副院長（太田、金子、谷内江、濱田、絹谷、長瀬^{以上医師}、宮本^薬、小藤^有、小川^事）の執行部共々、よろしくお願い申し上げます。

科の助手を拝命、職員や学生の検診にも関わりました。二〇〇三年金沢大学大学院医学系研究科に生活習慣病講座（寄附講座）が設置されるに伴い招聘戴きました。同講座では生活習慣病に関する臨床研究を手掛ける一方、共同研究を通して、第二内科の先生方との結びつきを深めました。二〇〇五年からは脂質研究講座（寄附講座）の馬淵宏教授のもとで、研究を進める上で、症例から学ぶことの重要性を習得させていただきました。

金沢医科大学総合内科学において、これまで培った生活習慣病に関する臨床研究を推進します。診療では、他科の医師、コメディカルの方々との良好な人間関係を確立し、やりがいのある部署を構築します。教育に関して、情熱をこめてとりくみ、良医の育成に日々邁進致します。若輩、浅学の者ですが今後ともよろしくお願い致します。

杏林大学医学部総合 医療学教室教授に就任 野村英樹教授（昭和六十三年卒業）



住み慣れた金
沢を離れ、平成
二十四年四月一
日付で杏林大
学三鷹の杏林
大学医学部総合

医療学教室に赴任致しました。ここに謹
んで皆様にご報告申し上げます。

私は昭和六十三年に金沢大学を卒業
後、竹田亮祐先生が主宰されていた第二
内科学講座に大学院生として所属し、東
福要平先生、紺井一郎先生をはじめ多く
の諸先輩方より、腎臓ならびにリウマチ
膠原病内科を中心に内科学全般のご指導

退職ご挨拶

脳細胞遺伝子学分野 東田 陽博



平成二十四
年（二〇一二）年
三月をもって退
職いたしました。
昭和五十五
年がん研究所

薬理部講師、翌年に助教授、昭和六十三
年二月に医学部附属神経情報研究施設神
経物性部教授に就任して以来、三十四年
にわたり、十全同窓会はじめ所属する医
学系研究科の関係各位等には大変お世話

を受けました。平成七年から三年間は、
馬淵宏教授のお許しを頂き、ハーバード
大学ブリガム・アンド・ウイミズズ病院
腎臓部門でリーダーズ、ズー、シュナイ
ダーの各先生らと苦しくも楽しい研究生
活を過ごさせて頂きました。帰沢後の平
成十一年四月より、小泉順二教授が着任
されていた附属病院総合診療部に助手と
してご採用頂き、以後講師、助（准）教
授として十三年間、総合内科の臨床・教
育・研究に携わると共に、卒後臨床研修
センターや地域医療連携室の立ち上げな
どに参加させて頂きました。

金沢―東京と距離は離れますが、北陸
新幹線の開業も数年後に控え、心理的な
距離はぐつと縮まるものと思います。十
全同窓会会員の皆様には、より一層のご
厚誼を賜りたく、何卒宜しくお願いを申
し上げる次第です。

になり感謝しております。

この間、医学部の一部の部局化（大学
院化）で金沢大学で初めての大学院教授
三人のうちの一人になりました。その後、
全ての部局で大学院化が改組織で医学研
究科さらには医薬保健学域医学類の教授
に変遷しました。

教育面においては、神経物性研究部門
および脳細胞遺伝子研究分野（講座）の
教授として神経化学的研究を行う等、学
生・院生の教育に尽力しました。また、

金沢大学子どものこころの発達研究センターや大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究所金沢校の新設に貢献しました。また、平成十六年九月から五年間金沢大学二十一世紀COE「発達・学習・記憶とその障害の革新脳科学の創成」プロジェクトのリーダーをし、金沢大学の特徴である文理融合型研究の推進をしました。

学術研究面においては、一貫して神経系の研究を行い、脳細胞遺伝子学を専門分野とし、特に脳の記憶過程の研究において神経特異的分子の関与の面に力を入れました。

①細胞培養系や分子レベルでの記憶のメカニズム…神経細胞膜興奮性のメカニズムに関する研究

記憶に関係のある伝達物質アセチルコリンが、ムスカリン性アセチルコリン受容体を活性化すると、膜電位依存性カリウムイオンチャネルの一つであるMチャネルを閉じて、持続した（秒から分単位）興奮性を生じる事、特にそれに足場タンパク質であるAKAPとタンパク質リン酸化酵素Cが関与する事を示した(Nature Neuroscience 11(10)11)。

②自閉症の中核症状である社会性認識とその記憶障害についての研究

社会性認識のきつかけを増加する作用を持つオキシトシンが重要な役割をし、そのオキシトシンの脳内分泌に関与する分子としてCD38を同定し、CD38を欠損すると社会性記憶喪失が生じる事をマウスで示した(Nature 11(10)7)。

③自閉症者のDNAの一塩基多型(SNP)解析研究

CD38の自閉症への関連を解析し、二つのSNPが自閉症のリスク因子である事を報告した(Neuroscience Research 11(1)1)。このSNPが、オキシトシンの血中濃度の低下と自閉症

東田陽博教授退職記念講演会・記念式開催

平成二十四年三月三日に、脳細胞遺伝子学分野東田陽博教授の最終記念講演会と記念式が医学部十全講堂と記念館で開催されました。

東田教授は昭和二十二年二月四日奈良県に生まれ、昭和四十六年三月岐阜大学医学部医学科を卒業し、同四十六年四月名古屋大学大学院医学研究科に入学、同五十年十月に同研究科を修了し医学博士を取得されました。同五十一年五月より米国国立衛生研究所(NIH)に二年半留学されました。帰国後、同五十五年二月に金沢大学がん研究所薬理学部門講師として着任され、その後、六十二年二月に金沢大学医学部神経情報研究施設・神経物性部教授に昇任されました。その後、大学院部局化・学部再編などに伴い、金沢大学大学院医学系研究科・脳細胞遺伝子学分野教授と名称変更されています。この間、平成四年から平成十年まで金沢大学医学部・神経情報研究施設長、平成二十年四月からは金沢大学子どものこころの発達研究センター・相互認識機能研究基礎部門教授・センター長を併任され、

が関連する事は他の報告でも確認された。子どものこころの歪みの医学的原因究明と、病気としての自閉症スペクトラムの治療法を確立する可能性を見出した事を理由に平成二十二年十一月三日金沢市文化賞を受賞した。

退職後、平成二十四年四月一日より金沢大学子どものこころの発達研究センター特任教授および大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究所教授に就任し、金沢大学内にて研究、教育活動をつづける予定ですので諸兄の御指導をお願いいたします。

さらに平成二十一年四月からは大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究所金沢校教授を兼任されてきました。学術研究面において、東田先生は一貫して神経系の研究を行われ、脳細胞遺伝子学を専門分野とし、特に脳の記憶過程における神経特異的分子の関与の研究に力を入られました。

一連の研究は、Natureをはじめとする超一流誌に掲載され、世界的に高い評価を得てきたことは周知のとおりです。約百七十篇の英文論文をいづれも一流誌に発表されましたが、とりわけ、二〇〇七年にNature誌に掲載された「自閉症の中核症状である社会性認識とその記憶障害についての研究」などが特筆されます。こうした優れた研究を背景として、東田先生がリーダーとして提案された「革新脳科学の創成」が、平成十六年の文科省の「二十一世紀COEプログラム」に採択され大きな成果を挙げられました。教育面において東田先生は、神経物性研究部門および脳細胞遺伝子研究分野で多くの優秀な人材を輩出されました。また、

金沢大学子どものこころの発達研究センターや大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究所金沢校の新設に多大な貢献をされ、また、金沢大学二十一世紀COE「発達・学習・記憶とその障害の革新脳科学の創成」プロジェクトのリーダーとして、金沢大学における文理融合型研究の推進に大きな成果を挙げられました。こうした学術・教育や社会的活動に対し、第六十四回金沢市文化賞を受賞されています。

最終講演会では、ご自身の研究者・教育者として歩まれた道を振り返りながらさらに今後への飛躍を述べられました。若いころから「新しい道を拓く」をモットーに積極的に世界的な優れた研究者との交流を求められたことなどを述べられ、深い感銘を与えられました。記念式では松井実行委員長の様式辞および記念品贈呈、中村信一学長、三宅邦明石川県健康福祉部参事（谷本正憲石川県知事代理）、佐藤保十全同窓会会長の祝辞の後、東田教授からご挨拶があり、同僚の方々や関係者との和気あいあいの歓談の後、古川侃金沢大学理事の万歳三唱で散会しました。

（医学系長 松井 修 記）

医薬保健研究域附属

脳・肝インターフェース

メデイシン研究センター

センター長 金子 周一

設置の経緯と目的

金沢大学は人間社会、理工学、医薬保健学の三学域を構成しています。第二期の中期目標・中期計画では、「つよいところをよりつよく」の観点から、この各研究域に先進的研究拠点の中核としての研究センターを設置することを定めましては平成二十三年三月十八日に「脳・肝インターフェースメデイシン研究センター」を設置しました。センターの目的は、高齢化社会の医学課題を解決するため、脳・肝を中心に分野を超えた学際的なアプローチにより、成人期・老年期疾患の病因・病態を解明し、二十二世紀に医療開拓への基盤作りを行うことです。

研究の背景と特徴

人類は栄養不良や感染症などの課題を次々に克服してきました。そして二十一世紀は栄養の過剰摂取と高齢化に伴う疾病を制御することが大きな課題となっています。これは飢餓の時代に進化を遂げた人類が飽食と長寿の時代に適合していないことに起因しています。この課題を克服するアプローチとして、センターでは人体の高次機能を司る脳と栄養代謝など代謝の中心臓器である肝臓に重点をおいて研究を行います。「インターフェースメデイシン」という独創的な単語がつけられています。これは脳と肝臓の独立研究だけでなく臓器間の密接な関係を研究するためです。

センターの構成

下記の四部門を設け、相互に連携して研究をすすめています。

- (一) 分子神経科学部門 部門長・櫻井 武教授
睡眠・覚醒と食行動など脳が司る諸機能の関係とその異常を明らかにする。
- (二) 環境応答学部門 部門長・金子周一
過栄養など生活習慣が諸臓器の代謝や形質発現におよぼす影響を明らかにする。
- (三) 生体統御学部門 部門長・井上 啓教授
脳と肝臓など臓器間のクロストークを担う仕組みの実体とその異常を明らかにする。
- (四) 生命創薬学部門 部門長・横井 毅教授
臓器連関とその破綻の解明に立脚した創薬研究を行う。

今後の展開

平成二十四年には文部科学省特別経費が認められました。ホームページ (<http://brainliver.w3.kanazawa-u.ac.jp/>) とセンターのロゴもできました。発足したばかりですが、学内外の研究者および研究機関と連携し、世界に発信できる成果を達成すべく研究が進められています。脳と肝臓だけでなく、多臓器との相関、およびトータルに人を研究対象とします。医薬保健研究域の皆様には勿論、十全同窓会の先生方にご協力をいただき、このセンターの目的を達成したいと考えておりますので何かと宜しくお願い致します。



医学部長就任ご挨拶

高知大学 橋本 良明 (昭和五十一年卒業)



十全同窓会会員の皆様にはご健勝のこととお慶び申し上げます。高知大学医学部法医学講座

に奉職しています橋本でございます。今年四月から高知大学医学部長に就任いたしました。この度、貴編集委員会から就任挨拶を寄稿する機会を与えられ光栄に存じております。近況の報告かたがた、一言就任のご挨拶を申し上げます。

私は、昭和五十一年に金沢大学医学部を卒業し、直ちに大学院生として法医学教室に入りました。当時主任であった何川涼教授は、その後岡山大学に転出されたため、後任の永野耐造教授のご指導の下で大学院を修了させて頂きました。その後、私は岡山大学助手に採用され、同大助教授を経て、平成三年に高知医科大学の法医学教授に就任いたしました。高知医科大学は昭和五十一年の開学ですが、平成十六年に高知県で既存の四学部を有する国立大学と統合し、国立大学法人高知大学医学部

図：脳・肝インターフェースメデイシン研究センターのロゴ

脳と肝臓の「偏」は「月」であり臓器を示します。脳と肝の「旁」である頭と体で「やじろべえ」を作りました。「やじろべえ」が、人体である「月」の上でパランスをとっているというロゴです。

となり今日に至っています。昨年十月に医学部附属病院は開院三十周年を迎えました。今年度から病院再開発計画に従い新棟建設に着工し、更なる地域住民への利便性向上および医学教育と研究の推進を図ります。また、地域医療の安定確保および将来想定されている東南海・南海地震災害時の医療支援対策を目的に、家庭医療学講座および災害・救急医療学講座を県の寄付講座として設置し、地域貢献度の高い医学部・附属病院を目指しています。

さて、母校を巣立ち長い年月が過ぎ去りました。母校で過ごした学生時代の何気ない記憶の断片が懐かしく脳裏に去来するこの頃です。自宅から徒歩での通学途中に同じく徒歩で通勤しておられた細菌学の西田尚紀教授から、親しくお声を掛けられ、お話を伺いながら登校したこと、また、解剖学の山田致知教授に解剖実習中の我が手を凝視された時の緊張感などが昨日のこのように懐かしく想われます。

高知県は、一昨年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」以来、毎年龍馬シリーズの観光キャンペーンを展開し、地域の活性化を図っています。今年度もあの洋画名作「ローマの休日」から借用し、「ローマの休日」と銘打って、「志国」高知への観光客誘致事業を展開しています。高知大学医学部キャンパスのすぐ近くには、戦国時代に四国全体を一時期制覇した大名である長宗我部元親の居城跡が史跡として残っています。高知にお越しの節にはぜひお声をお掛け下さい。十全同窓会会員の皆様のご健勝を祈念しつつ、就任のご挨拶とさせていただきます。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

受賞

文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)受賞

東田 陽博

この度、「自閉症の社会性障害の神経内分泌学的研究」で、文部科学大臣表彰科学技術賞(研究部門)を受賞致しました。私は、永年に渡って脳の記憶過程の神経化学的研究を行ってきました。覚醒に関係のある伝達物質アセチルコリンが、ムスカリン性アセチルコリン受容体を活性化すると、膜電位依存性カリウムイオンチャネルの一つであるMチャネルを閉じて、持続した(秒から分単位)興奮性を生じること、特にそれに足場タンパク質であるAKAPとタンパク質リン酸化酵素Cが関与する事を二〇〇三年にNature Neuroscienceで示しました。続いて、社会性認識のきつ

文部科学大臣表彰若手科学者賞(研究部門)受賞

脳・肝インターフェースメディスン研究センター 教授 佐藤 純

この度、「シヨウジョウバエ視覚中枢における神経回路形成の研究」に対し文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞いたしました。

様々な生命現象を分子レベルで理解する上でハエは非常に有用な実験動物であり、ハエの視覚中枢はほ乳類の脳と共通した構造的・機能的特徴を持つ大変興味深い系です。しかし、その形成機構は全く分かっておらず研究が大きく立ち後れていました。

本研究はハエ視覚中枢を用いて分子レベルの神経科学研究を推進する上での基盤を構築したという、きわめて基礎的な研究です。

ハエ視覚中枢の前駆体が進化的に保存された転写因子の発現によって同心円

かけを増加する作用を持つオキシトシンが重要な役割をし、そのオキシトシンの脳内分泌

に關与する分子としてCD38を同定しました。CD38を欠損すると社会性記憶喪失が生じる事をマウスで示し、その研究成果が二〇〇七年にNatureに掲載されました。CD38と自閉症との関連を調査し、二つのSNPが自閉症のリスク因子である事を二〇一〇年Neuroscience Researchに報告しました。このSNPが自閉症でオキシトシンの血中濃度の低下と関連する事が他の報告でも確認され、子どものこころのひずみの医学的原因究明と、病氣としての自閉症スペクトラムのオキシトシンによる治療法を確立する可能性を示した事が評価されて受賞に繋がりました。

状に区画化されること

を見出し、神経細胞の産生順と神経細胞タイプ、細胞移動パターン、

投射パターンそして神経機能の間に密接な関係があることを明らかにしました。

このような地道な研究に対して荣誉ある賞を授与されたことを大変有り難く思います。本研究成果を基盤として、今後様々な研究を推進したいと考えております。神経回路の形成機構と動作機構の解明だけでなく、ハエ視覚中枢をモデルとして様々な神経疾患の分子メカニズムの理解に貢献していきたいと考えております。本研究は本学フロンティアサイエンス機構および脳・肝インターフェースメディスン研究センターにおいて行われたものであり、関係者の皆様、そして研究室メンバーに深く感謝いたします。

日本医師会

医学研究奨励賞を受賞

村上英樹博士(平成五年卒業)

平成二十三年十一月一日、日本医師会館で開かれた第六十四回日本医師会設立記念医学大会の席上において平成二十三年日本医師会医学研究奨励賞を受賞しました。テーマは「凍結免疫療法を併用した新しい脊椎転移がん手術の開発」です。これは、金沢大学整形外科教室で開発された厚生労働省から先進医療にも認定されている二つの手術「腫瘍脊椎骨全摘術」と「自家液体室素処理骨移植」を組み合わせたもので、脊椎転移がんの局所根治だけでなく、同時に全身のがん免疫も増強しようという全く新しいコンセプトの手術です。

日本医師会では昭和三十七年に医学研究助成が始まり、金沢大学ではこれまで倉知与志先生(昭和四十年)、本陣良平先生(昭和四十二年)、岡田晃先生(昭和四十八年)、高橋守信先生(昭和五十七年)、高守正治先生(昭和五十七年)、小林勉先生(昭和六十二年)、澤武紀雄先生(平成九年)、並木幹夫先生(平成九年)、大島徹先生(平成十一年)、井上正樹先生(平成十二年)、小泉晶一先生(平成十四年)、山田正仁先生(平成十八年)と錚々たる先生方が受賞されており、このような荣誉ある賞を私が頂き大変に身の引き締まる思いです。さらに精進し研究を進めて行きたいと決意を新たにしております。最後に、本研究に關し終始一貫してご指導を頂いている土屋弘行教授と本賞の推薦を頂きました富田勝郎病院院長に心より御礼申し上げます。

高松宮妃癌研究基金

一般助成を受賞

村上英樹博士(平成五年卒業)

平成二十四年一月に平成二十三年度(第四十三回)高松宮妃癌研究基金一般研究助成を受賞しました。テーマは前述の日本医師会医学研究奨励賞と同じで「免疫療法が同時に可能な新しい脊椎癌根治手術の開発」です。高松宮妃殿下は、昭和天皇の弟(大正天皇の三男)である高松宮宣仁親王のお妃であり、第十五代将軍徳川慶喜の孫にあたられます。妃殿下は実母の實枝子さまを結腸癌で亡くされた事から、癌の撲滅に関わられるようになり、この基金を昭和四十三年に創設されました。妃殿下が亡くなられた後は、「ヒゲの殿下」の愛称で親しまれている寛仁親王が、高松宮妃癌研究基金の総裁になられています。これまで金沢大学では、がん研究所の清水元治教授(平成六年)と高倉伸幸教授(平成十三年)の二人がこの助成を受賞されています。

平成二十四年二月二十二日、東京のホテルグランドパレスにて贈呈式が行われ、私も出席してまいりました。残念なことに、総裁の寛仁親王はご静養のためご臨席が叶わず、代わりに寛仁親王の次女である瑠子女王殿下がご臨席されました。式典は、やはり皇室行事の一環であり非常に厳かに進行していき、私は瑠子女王殿下より目録を頂き大変感激しました。今後は、妃殿下終生のご念願であった癌の撲滅に少しでも貢献できるよう研究に邁進する所存でございます。

過去は未来を解く鍵

十全同窓会理事長 加藤 聖

本年、金沢大学医学部は創立百五十周年を迎えます。来る七月七日（土）午前十時、十全講堂に於いて、医学部創立百五十周年の記念式典が挙行されます。今から丁度五十年前、当時の観光会館（現、金沢歌劇座）で開かれた創立百周年記念式以来の本学の節目となる記念の式典です。当日はご来賓の祝辞、学類長の挨拶の後、京都大学教授本庶佑先生、並びに建築家安藤忠雄先生の特別講演があります。その後、場所を中庭に移して園遊会方式の記念パーティーも予定されております。この園遊会方式のパーティーは大正十五年五月に催された旧制金沢医科大学の開学祝賀式に倣って企画致しました。同窓会員の皆様にはこぞって出席され、久しぶりに学生時代にタイムスリップしていただきたいと思えます。この様な盛大な事業を挙行出来ますのも、同窓会会員諸氏のご厚情の賜物と深く感謝申し上げます。

歴史を紐解きますと、本学は、加賀藩による彦三種痘所が文久二年（一八六二）に開設されたことを創基としております。しかし、実際は、それから八年後の金沢医学館の開設、およびオランダ医師スロイス、続くホルトルマン両先生の招聘が本格的な西洋医学（実際にはオランダ医学）の教育実践の始まりと考えられます。その後、東京大学出身の教諭を迎え、次第にドイツ医学へと移行し、戦後の欧米医学教育への変遷を経て現在に

至っています。創立百周年の記念事業の目玉は十全講堂の建設でしたが、今回は百五十周年記念としてモニュメントの建立と、その周辺整備事業として、十全講堂へのプロムナードの整備を計画しております。このモニュメントは「医の源流未来への継承」と題し、その題材となつたのが金沢大学医学部の正に原型「金沢医学館」の第一期生九名の写真（金沢市医師会所蔵）です。若い学生さんや卒業生の方から見れば古色蒼然とした感を持たれるかと思いますが、彼らこそが加賀藩の命により当地における最初の洋医（正確には蘭医）育成の要請に応募した九名です。我が国が従前の漢方医育成から大きく舵を切り出した時機です。卒業後、この九名は、或る者は金沢病院で、或る者は高岡、七尾、大聖寺、武生の分院等へ赴き、診療運営に参画し、今日の北陸地方の医学・医療を切り拓いた先達です。この九名はまた、我が十全同窓会の最初の正会員にもなっております。

昭和三十七年の百周年からの半世紀は我が国の医学・医療の歴史においても特筆すべき大きな変化の五十年であり、時恰も我が国の右肩上がりの高度成長期の始まりから、バブル絶頂期、その後のバブル崩壊、沈黙の二十年を経た時期でした。本学もこの間に、旧制医科大学の名残の校舎から昭和四十二年頃新校舎に建て替えられ、それが今また全て新しいモダンな学部・病院・研究棟に生まれ変わ

りつつあります。医学・医療の内容から見ればコンピュータ断層撮影装置や核磁気共鳴画像装置など、次々と新しい臨床検査機器が開発された日々でした。しかし、国の内外を見渡すと、国家や社会制度も戦後六十年を経て、人や物の動きが大きく様変わりし、若年層人口の減少、未曾有の高齢社会を迎えています。医療においても国民皆保険制度のゆらぎ等、国民が等しく同一の良き医療を受けられることが困難になっており、老々介護や孤独死などが日常的にマスコミを賑わしています。正に日本自体が制度疲労を起し倒れる寸前の感があります。この時代に百五十周年を迎えるにあたり、本学に籍を置くものは然り、全国で活躍されている卒業生の皆様も含め、もう一度建学の精神に立ち戻らなければなりません。現在、延べ会員数一万三千余名を有し、連絡可能な現会員数が六千三百名という大きな組織であり、全国の大学・病院・医療施設で数多くの会員が活躍されている本会ですが、大きな日本社会のうねりの中に身を置き、日常的に矛盾や不合理的もたくさん感じておられる会員諸氏も多いことと察します。このような時に満足している訳にはいきません。

一昨年亡くなられた作家井上ひさし氏の絶筆ノート（文芸春秋・二〇一〇年七月号）の言葉に、「いつまでも過去を軽んじていると、やがて未来から軽んじられる」があります。こういう先行きの見えない時だからこそ、過去から学ぶことが多いのではないのでしょうか。明治初頭の我が国の大変革の時代に、将来に大き

な夢と希望を抱き、昼夜を問わずスロイス、ホルトルマン両先生のオランダ医学（解剖学、病理学、健康学、外科学、眼科学など十八科目）を必死に学ばれた先達の苦労は、想像を絶するものだったでしょう。因みに第一期生の一人、藤本純吉の全講義ノート三十七点は、藤本文庫として玉川図書館近世資料館に所蔵されております。この様に、未知の分野に敢然と挑戦された本学草創期の先人に目を向け、その熱い息吹を感じ、皆様方の今後の糧にして頂きたいのです。このような思いを込めて記念碑を製作致しました。式当日に除幕式も行われます。将来完成するプロムナードを散策しながら、このモニュメントを眺め、百五十周年の意義を深く味わってみたい。最後になりましたが、七月七日（土）は五十年に一度の記念すべき日になります。是非全国会員の皆様にお集まり頂き、旧交を温めて頂きたいと願っております。



プロムナードとモニュメントの完成予定図

学会報告

— 伝統から創造へ —
第二十四回日本喉頭科学会

第二十四回日本喉頭科学会を平成二十四年三月八日(木)・九日(金)、金沢市文化ホールにて開催しました。

金沢大学医学部が創立百五十周年を迎える記念すべき本年、それにふさわしい会にすべく「伝統から創造へ」をメインコンセプトに掲げて企画を創案しました。そして、シンポジウム、教育パネル、いずれも時間軸を取り入れたタイトルとしました。

シンポジウム「喉頭癌治療の現状と展望」のように治療法を使い分けてゆくか―は塩谷彰浩教授(防衛医大)に司会をお願いしました。田口享秀先生(横浜市立大)には高用量シスプラチンを中心とした全身化学療法と放射線同時併用療法、脇坂尚宏先生(金沢大)にはシスプラチン動注による化学放射線同時併用療法の実践について、富藤雅之先生(防衛医大)に経口的喉頭部分切除術、藤井隆先生(大阪成人病センター)に外切開による喉頭部分切除術について解説していただきました。生存率を指標にした喉頭癌治療成績は、QOLを重視した治療へと移行しつつあります。シンブルにはまとめられない課題ですが、治療法の選択肢を多く用意して、多様な患者ニーズに応えてゆくことの大切さを再認識す



ることができました。

シンポジウム2「難治性喉頭疾患に対する診断・治療の現状と展開」は大森孝一教授(福島県立医大)の司会により進められました。室野重之先生(金沢大)は発癌のロースリスク型HPVが関与する再発性喉頭乳頭腫に対して抗ウイルス剤治療法の理論と実際を、片田彰博先生(旭川医大)には多発血管炎性肉芽腫症(いわゆるMikulicz肉芽腫症)に対する早期診断とステロイド投与のタイミングについて、讃岐徹治先生(熊本大)には痙攣性発声障害の診断と治療法について、廣田隆一先生(京都府立医大)には両側喉頭麻痺に対するアプローチの実際、多田靖宏先生(福島県立医大)には気管狭窄症の治療法について、難しい内容をわかりやすく解説していただきました。それぞれ演者の所属教室が心血を注いで研究している分野であり、これらの疾患がもはや難治と言われない時代の到来を予見させる充実した内容でありました。

教育パネル「明日から役立つ臨床の技!これからの専門医育成のために」は丹生健一教授(神戸大)および梅野博仁准教授(久留米大)に司会進行をお願いしました。齋藤康一郎先生(慶応大)には顕微鏡下に行う喉頭微細手術の基本について、平野滋先生(京都大)にはマイクロフラップ法について、原浩貴先生(山口大)にはビデオラリಂಗゴによる手術のコツについて、二藤隆春先生(東京大)には脂肪注入の実際と適応疾患について、齋藤幹先生(神戸大)には甲狀軟骨形成術I型と披裂軟骨内転術成功のためのコツについて解説していただきました。いずれの講演ともポイントがしっか

り押さえられており、後期研修医のみならず初期研修医にも理解しやすい、本場にこれからの専門医育成につながる内容のパネルであったと感じています。

ご支援を賜りました十全同窓会に深謝いたします。(会長 吉崎 智一 記)

第四十八回日本腹部救急医学会総会を終えて

平成二十四年三月十四日(水)、十五日(木)の二日間、石川県立音楽堂、ホテル日航金沢、ANAクラウンプラザホテル金沢、金沢市アートホールにおいて、第四十八回日本腹部救急医学会総会を開催させていただきました。開催前日は三月としては珍しい吹雪となり心配されましたが、学会期間中は一転して天候にも恵まれ、消化器外科医、救命救急医、放射線科医を中心に、研修医やコメディカルスタッフの参加も含め、計二千名を超える出席者がありました。

本学会は、腹膜炎、脾炎などの腹部の急性疾患や、腹部の外傷性疾患などの腹部救急疾患を学ぶことを目的とした学会であり、会長講演、理事長講演、特別講演に加えて、三つの教育講演、二つの特別企画、八つの教育セミナーなど、過去最高の計千二百八十六題の発表があり、活発な討論が交わされました。また救急疾患を経験し、自ら発表する若手医師の登壇の場でもあり、今回の学会でも研修医企画には百二十三題もの応募があり、優秀賞三十名が表彰されました。

特別講演として、日本テレビ放送報道局の高田和男様から「医療現場の取材メモか

ら―いのちの授業に寄せる思い―」のタイトルで、ある患者さんの生き方をもとに、生きることの意義、命をつなぐことの意味などをお話いただき、聴衆に命の尊さを改めて問いかけられました。



特別企画(二)では、「自然災害時での救助・救済・復旧・復興・振興に向けた取り組み―能登半島地震や東日本大震災を振り返って―」と題して、東北大学の菅野武先生、恵寿総合病院の神野正博先生、金沢大学の稲葉英夫先生の三人の講師から、貴重な体験をもとに、病院としての地震対策、地域における援助、DMATなど外部からの支援について、様々な提言がなされました。特別企画(二)「脳死臓器移植を救急医療として見つめる―脳死臓器移植は救急医療における命のバトンタッチ―」では、法律の改定により増加が期待される脳死臓器移植について、救急治療を受けている患者が突然脳死移植ドナーとなる状況の中で、スムーズな命の受け渡しをすることは非常にデリケートな問題であり、救命救急医、外科医のみならず、患者との橋渡しをする移植コーディネーターの役割が重要であることが指摘されました。

最後になりましたが、今回の学会の開催に当たり、金沢大学第二外科同門会、金沢大学十全医学会、金沢大学消化器・乳腺・移植再生外科のスタッフを始め、多くの方々にご支援をいただきました。皆様には心よりお礼を申し上げます。(藤村 隆 記)

十全学術行脚 第二十三回

―金沢医科大学臨床医学・内科系―

今回の金沢医科大学における十全学術行脚の終わりととして臨床の内科系講座、小児科学、精神神経科学および病院診療科に在籍される現職の教授・准教授・講師の先生方の学術内容を紹介します。

一、梅博久・部門教授（呼吸器内科学）



梅博久教授（昭和五十四年卒業）は、二〇〇九年十月より医学部長を務めている。一九八二年から呼吸

器病態の研究と診療を担当しており、臨床病理学と共同で開発した安静呼吸時の気道抵抗測定や工学的な気道コンプライアンスの測定法は検査機器として実用化されている。動物肺体外循環モデルを用いて低酸素に対する肺循環の反応、脂質メデイエーターや内皮由来拡張因子（NO）の生理的および肺循環疾患における役割を明らかにしてきた。動物肺傷害モデルと単離II型肺上皮細胞を用いて細胞分子生物学的手法により、急性呼吸窮迫症候群（ARDS）の発症、治療についての研究を進めてきた。さらに、閉塞性睡眠時無呼吸症候群（OSAS）の上気道特性を評価するために、音波を用いた気道断面積測定法により上気道虚脱性を推定する方法を確立した。耳鼻科

とも協力して、睡眠時に狭窄、閉塞する上気道の開存性を維持する治療について研究を進めている。

二、横山仁・部門教授（腎臓内科学）



横山（昭和五十五年卒業）は、現在医学部・教務部長を務めている。旧第一内科の出身で附属病院血液浄化療

法部より平成十八年に着任した。これまでの伝統を生かした「総合的な腎臓内科学」をテーマとして教育、診療、研究を行っている。現在、日本腎臓学会腎臓病総合レジストリーの構築運用を担当し、厚生労働省「進行性腎障害調査研究班」の分担研究者として日本における難治性ネフローゼ症候群、急速進行性腎炎症候群、「 α_1 腎症、多発性嚢胞腎の疫学・臨床研究を推進している。加えてこれまでの研究テーマである（一）腎炎・ネフローゼ症候群の臨床病理学的研究、（二）血液浄化療法の臨床的応用に関する研究、（三）移植腎障害の臨床病理学的研究について、ループス腎炎の臨床病理と疫学研究、難治性ネフローゼ症候群、特に膜性腎症における臨床疫学とCD80分子や新たに見出された膜型Phospholipase A2 receptor、抗体の検討、さらに、移

植腎障害におけるアデポサイトカイン、non-classical HLA分子、circulating fibrocytesの研究により腎障害機序の一端を解明している。

三、梶波康二・部門教授（循環器内科学）



梶波康二教授（昭和五十九年卒業）は、旧第二内科出身で、竹田亮祐名誉教授、馬淵宏名誉教授（現脂質研究

講座特任教授）のもとで、家族性高コレステロール血症におけるLDL受容体遺伝子異常を探索し日本初の知見を報告するなど、脂質代謝異常と動脈硬化症に関する遺伝子レベルの知見と臨床像との関連を研究した。一九九九年十一月に金沢医科大学循環器内科に赴任後は、この実績を基にさらなる発展を目指してきた。二〇〇四年九月に循環器内科学部門（主任）教授に昇任し、心血管疾患全般の診療を担当するとともに、医学部生および大学院生の教育・研究指導を通じ、次世代を担う「良医の育成」を目指している。平成二十〇二二年年度にはNEDOプロジェクト「マイクロドース臨床試験を活用した革新的創薬技術の開発」に参画し新しい枠組みでの臨床研究に成果を挙げている。

四、元雄良治・部門教授（腫瘍内科学）



元雄良治教授（東京医科大学卒業）は、昭和五十五年旧第一内科に入局し、がん研究所腫瘍内科で澤武紀雄教授のもとで肺癌を中心に腫瘍マ―

カーや腫ストレス蛋白の研究と腫瘍内科の臨床に携わってきたが、平成十七年に金沢医科大学に腫瘍内科学教室を立ち上げるために赴任した。診療面では集学的がん治療センター長として、各科からの外来化学療法に依頼に腫瘍内科として対応している。またキャンサーボードを運営し、化学療法委員会委員長としてレジメン審査等に従事している。教育面では、内科総論・医学総論・医学英語への参加、腫瘍総論の責任者・第五、六年年の臨床実習を担当している。研究面では総合医学研究所先端医療研究領域腫瘍制御研究分野教授を併任し、肺癌の薬剤耐性の分子機序解明とその克服を主なテーマとしている。北陸がんプロフェッショナル養成プランでは、金沢医科大学の実務者として金沢大学と連携しており、がんプロ認定機構理事である。また石川県がん診療連携協議会の委員として、学内ではがん診療連携拠点病院運営委員長も務めている。

五、中川淳・准教授（内分泌代謝内科学）



中川淳准教授（昭和五十九年卒業）は第二内科出身、当時の竹田亮祐教授および中林肇講師（後に保健管理セ

ンター教授）のもとで内分泌学の指導を受けている。平成十一年四月、第二内科助手より金沢医科大学内分泌内科学講師として赴任、平成十三年助教、教室名・職名変更を経て現在糖尿病・内分泌内科学所属。研究面では恩師の中林先生が見出した迷走神経求心性線維による消化管ホルモン、特にインクレチンの感受機構

に関する研究を続けており、最近のインクレチン関連糖尿病薬の登場に伴い注目されている。臨床面では、下垂体から甲状腺・副腎にいたる内分泌臨床のほぼ全領域にわたり、数多くの患者さんの診断・治療において中心的役割を担っている。また、病院における医療安全対策に十年以上にわたりかかわっており、現在は医療安全全部部長を兼務している。

六、犀川太・部門教授（小児科学）



犀川太教授（昭和五十八年卒業）は、卒業後、小児科学教室で小児血液悪性腫瘍の診療と研究に携わり、平

成二十年七月から金沢医科大学小児科学教室の運営、診療、研究と医学生教育に従事しています。総合診療科としての小児（内）科は一科で大学病院全般の臓器別診療対象をカバーしなければなりません。現在、新生児医療、小児血液悪性腫瘍、小児循環器、小児神経、小児内分泌代謝、小児アレルギーはそれぞれの分野で高度の専門性を保ちつつ、地域医療との連携を進めています。一方、各専門の境界領域にも対応できる力が必要です。「専門分野はできて当たり前。ニツチを支える力が底力」と考えて、専門分野を極める一方で、小児科医としての基礎力向上ができる環境作りに奔走しています。

七、川崎康弘・部門教授、窪田孝・特任教授（精神神経科学）

川崎康弘教授（金沢医科大学昭和六十年卒業、大学院平成二年修了）は、旧神



経精神医学教室にて山口成良教授、越野好文教授に師事し、富山大学（倉知正佳教授、鈴木道雄教授）を経て、

平成二十二年七月に金沢医科大学出身者としては初めて母校の部門教授に就任。主な研究領域である機能的精神病の脳画像研究は国際的に評価されており、教室の特徴でもある生物学的精神医学研究の発展に取り組んでいる。着任後に近赤外線スペクトロスコピーによるうつ状態診断の高度先進医療を導入し、他の脳画像診断法や神経心理検査を用いた、臨床診断法の開発に関する臨床研究をおこなっている。臨床では認知行動療法や心理社会的治療の積極的な導入やリエゾン精神医療や緩和医療の普及に努め、行政や社会資源との連携や他の診療科領域における心身医学的介入など、精神科の医療にとどまらない開かれた精神医療をめざしている。



窪田孝教授は昭和五十三年に金沢大学医学部を卒業。旧神経精神医学教室にて山口成良教授に師事し、松任

石川中央病院を経て平成十年四月に講師として着任。平成十四年に助教授、平成二十一年から特任教授の任にある。前任の地曳曳亀部門教授の下で開始された電気生理学的方法とマイクロダイアリスを用いたモノアミン測定の実験により、非定型抗精神病薬の作用機序に関する系統的な研究をおこなっている。臨床では北陸地域のてんかん診療の第一人者

として指導的立場にある。また導入に努めた経頭蓋磁気刺激法による難治性うつ病治療は、北陸地域で唯一施行可能な診療機関として評価されている。

初代山口成良教授、二代鳥居方策教授、三代地曳曳亀教授、現職川崎康弘教授と金沢大学旧神経精神医学教室の伝統を強く受け継ぐ教室であり、「良医を育てる」という建学精神のもと、全人的医療を推進し臨床と教育に力を注いでいる。

八、渡邊直人・特任教授、谷口充・准教授（放射線医学）



渡邊直人・特任教授（昭和五十八年卒業）と谷口充・准教授（昭和六十年卒業）は、主に核医学を担当している。

過去には同窓の宮村名譽教授、山本名譽教授、興村名譽教授、大口先生（現松任中央病院所属）が所属されておられ、金沢大学との関係は深い。金沢大学核医学利波紀久名譽教授の実弟である利波久雄教授が現在主任を務めている。以下は渡邊先生のお話です。

渡邊は平成二十一年より富山大学から赴任して、現在PET・CTを中心に画像診断を担当している。卒業後、久田欽一名譽教授の門を叩き、不肖の弟子の一人に加えて頂き今日まで来ている。核医学の自由闊達な医局での大学院生活は、今でも財産となっている。こちらに移ってから、富山大学の舟田久教授のご紹介もあり、生化学Iの岩淵教授（昭和五十九年卒業）との共同研究が進行している。アイソトープ治療におけるリンパ球の放射線障害に関する研究で、突然予

想もしていなかった原発事故による被曝問題が発生したために、以前は全く注目もされていなかった研究分野にもひよっとしたら光がさしてくるかもしれない。谷口先生も核医学教室出身で、平成六年に赴任されて現在は当医局の中心となって活躍中である。専門は核医学の特に循環器であるが、幅広く画像診断に関心が深い。各科からの画像診断の要望は強まる傾向にあり、今後の益々の活躍が望まれている。

九、影近謙治・特任教授（運動機能病態学・リハビリテーション科）



影近謙治教授（昭和六十一年卒業）は、二〇〇九年四月に赴任された。リハビリテーション科は、一九九七

年四月に日本海側唯一の大学病院のリハビリテーション科として新設され、科長・センター部長に初代の山口昌夫教授が就任されています。リハビリ専門医は全国的にも不足しておりますが、高齢化や多様な生活習慣病を原因とする障害はますます増加の一途をたどっています。現在常勤医二名、非常勤医四名とこれらの障害に対して日々奮闘しています。ICUでの超急性期・早期リハビリを鋭意推進し、計画的な手術例では術前から対応し、緊急を要するものについては毎日外来を行い、年間二、〇〇〇件の新患のリハビリ方を出しています。研究に関しては、各専門外来に関連する臨床研究を行っており、他施設とも活発に交流し、金沢工業大学、岐阜大学工学部、松本歯科大学、スウェーデンのカロリンスカ研究所、ウ

医師会コーナー

石川県医師会会長就任ご挨拶

近藤 邦夫



本年四月一日に、石川県医師会会長に就任いたしました。昭和五十四年金沢医科大学卒業後、金沢大学医学部大学院（旧第三内科）を修了して、平成元年金沢市で開業しております。旧第三内科初代教授 服部 絢一先生のご指導で骨髄移植免疫を研究させて頂きました。温かい医局員、会員の皆様に支えられて今日に至っております。平成八年から石川県医師会理事を十六年間勤め、今回会長の職に就くこととなりました。会員、県民のためにこの重責を果たす所存であります。金沢大学医学部から、毎年副会長をご推薦いただき、医師会業務に大変ご理解、ご協力をお願いいたします。

石川県医師会は、会員千六百三十三人（開業医八百人、勤務医八百三十三人）で構成され、医の倫理に徹し、医学・医療の研鑽に励み、患者・地域住民の健康に貢献することを目的とした学術団体であります。能登、加賀、中央地区に九つの郡市医師会があり、地域医療、福祉、介護を支えてきております。しかしながら、昨今地域医療の崩壊が叫ばれ、その再生に苦慮しております。ご存じのように日本は急速な少子高齢社会に突入し、二〇二五年には四人に一人が高齢者となります。しかし、国の緊迫する財政事情

から、医療費抑制政策が際限なく続けられてきました。その結果、地域医療は崩壊しその再生のため

の努力が継続的に行われ、国からの地域医療再生計画に基づき様々な事業も行われております。特に、金沢大学医学部においては、能登北部の医師不足を改善するために寄付講座を作つて頂き、さらに中長期的な対応として医学部特別枠入学者を五人から十人に拡充し、地域医療を担う医師を養成・確保して頂いております。また、県内すべての研修医等が診療の実技を修練できる医学研修シミュレーションセンターの整備も行われております。一方、県医師会としては、これからも会員の先生方や、医療、福祉、介護の関連職種の方々と連携しながら、県民の方々が安心して過ごせるような環境作りに力を入れていきます。また、女性医師の対応として女性医師支援センター機能を強化し、女性医師への相談・助言などの支援体制を構築しております。また、高齢化の進展とともに在宅医療の受け皿が必要となつてきております。急性、慢性期医療後の在宅医療推進のため、連携拠点事業を行政とともに行ってきております。

メオ大学、ハルピンの黒龍江省立病院と共同研究を行っています。また毎年海外から講師を招きりハ医療技術を高めるための国際交流セミナーを開催しています。

十. 伊藤透・臨床教授、北方秀一・准教授（内視鏡科）

伊藤透教授（金沢医科大学卒業）は、昭和六十一年四月より金沢大学がん研究所付属病院外科に入局し、故磨伊正義教授のもとで、外科学、腫瘍学、内視鏡診断学の指導を受けている。この間、助手、内視鏡室室長、医局長を歴任している。平成六年より金沢医科大学消化器内科に移り、内視鏡診断・治療を中心とした消化器癌、消化器病疾患の診療に携わっている。平成十九年四月に内視鏡科を開設、平成二十年十月に教授に就任し、常に第一線に立ち、診断、治療、後身の指導にあたっている。粘膜下層剥離術（ESD）の開発当初より同技術に取り組み、その発展に寄与してきた。現在、消化器外科と協力し、NOTES (Natural Orifice Transluminal Endoscopic Surgery) およびセンチネルナビゲーション手術の一つとしての「リンパ節陰性SM胃癌に対する胃局所全層切除術」の開発に取り組んでいる。

北方秀一准教授（平成十年卒業）は、金沢大学がん研究所付属病院外科に入局し、故磨伊正義教授のもとで、外科学、腫瘍学、内視鏡診断学の指導を受け、平成二十一年から金沢医科大学内視鏡科に



伊藤透教授（金沢医科大学卒業）は、昭和六十一年四月より金沢大学がん研究所付属病院外科に入局し、

講師として赴任している。平成二十三年七月より医局長を務めている。がん研究所腫瘍外科時代は外科医として日常診療に携わっていたが、現在は内視鏡医として、早期消化器癌の内視鏡診断・治療に携わっている。二〇一一年には伊藤教授とともにロシア・ヤロスラブリ大学において早期胃癌のESDのデモンストレーションを行った。さらに外科での経験を生かし、伊藤教授とともにリンパ節陰性SM胃癌に対する胃局所全層切除術の開発に取り組んでいる。

（追記）平成二十四年四月より総合内科学部門教授として小林淳二先生（昭和五十九年卒業）が就任され、今後のご活躍が期待される。

（横山 仁 記）

同窓会名簿

本年12月上旬刊行予定

平成23年度、24年度会費納入の方に発送致します。

本号に会費払込用紙を同封いたしております。

病院紹介

加賀市民病院

はじめに

加賀市は、石川県の南端に位置し、歴史的には大聖寺藩であります。金沢に次ぐ城下町であり、産業としては九谷焼発祥の地で、山中漆器があり、藩政時代から続く片野の鴨池の坂網狐など豊かな伝統文化があります。また、深田久弥をして、最も白山が美しく見えるところ、と言わしめた、風光明媚な街であります。山中温泉、山代温泉、片山津温泉を持つ観光地でもあり、多くの観光客が来られます。人口は約七万二千人ですが、六十五歳以上の高齢者は二十七・九%と多く、少子高齢化が進んでいます。また、世帯数は約二万八千世帯の内、高齢者夫婦世帯も、単身高齢者世帯共に10%を超えています。加賀市民病院は加賀市の南の大聖寺にあります。病床数は一般二百二十六床(うち、回復期リハビリテーション病床四十二床)で、内科、循環器内科、呼吸器内科、外科、消化器外科、整形外科、泌尿器科、皮膚科、眼科、脳神経外科、小児科、耳鼻咽喉科、産婦人科、放射線科、麻酔科、リハビリテーション科の十六科を標榜しています。常勤医師は内科八名、外科四名、整形外科三名、泌尿器科二名、皮膚科一名、眼科一名、脳神経外科三名、小児科一名、耳鼻咽喉科一名、産婦人科二名、放射線科一名、麻酔科一名の合計二十八名です。その他に、専門医療をするために、金沢大学、

金沢医科大学、福井大学から、非常勤医師の応援を頂いております。地域の病院として、救急対応のみならず、地域に貢献するために、出前講座として、職員一丸となり、地域に出向き、市民教育をしております。また、行政と協力して、検診および、保健指導も行なっております。

沿革

加賀市民病院は金沢大学医学部に次いで、県内で二番目に長い歴史を持っています。明治十二年に認可を受け、明治十三年に石川県立金沢病院大聖寺出張所として開業しております。直接の動機はコレラの流行によると言われていますが、藩政時代から培われた大聖寺を中心とする江沼郡の医学における水準の高さと、十四代藩主以来の官民による病院建設への情熱が結実したものと思われまゝす。緒方洪庵の適塾の塾頭を務めた、渡辺卯三郎を顧問とし、黒川良安の親戚でもある稲坂謙吉を初代院長としました。歴史の流れの中で病院の名称は、大聖寺病院、江沼病院、公立加賀中央病院、加賀市民病院と変化しましたが、地域のための医療という理念は、職員の信念となつていきます。当院のエントランスホールには、創業当時の資料を展示しており、緒方洪庵の扶氏遺訓等が我々に当時の高い医の志を教えてくれます。

病院の現状と取り組み

古き伝統は、それに縛られるのではなく、心の中で誇りとし、更に新しいことに挑戦していく原動力にならなければなりません。日々進化する医療をしつかりと身に付け、それを地域の人々のために行使する志を引き継がなければなりません。しかし、入院患者の高齢化が進み、

在宅に戻すことが難しくなつてきています。今後は、地域全体が一つの病院との考えで、職員全員で各医療機関との連携に力を注いでおります。

救急医療は、当院では、医師不足と、常勤医師の高齢化もあり、当直業務が負担になつてきていました。また、患者からのクレームが多くなり、医療裁判が増えたこと、結果が悪ければ訴えられ、逮捕されることもありうる状況になり、一時当直医の専門外は救急車を断ることが多くなつてきました。そのために、周囲の病院にも大変ご迷惑をおかけし、何より市民からの信頼が薄らいできました。現在は、救急はできるだけ診るよう方向転換をし、救急車の受け入れも増えてきて、市民からの信頼感も少しずつ回復してきています。入院患者も増えてきています。

しかし、医師不足、看護師不足が元凶であり、医師は、大学の医局の応援により、若い医師の派遣を受け、看護師は、看護学校の教育に力を注ぎ、女性が働きやすい環境を整えるようにしています。同時に、先端の病院の協力を得て、研修ができ、生涯教育ができる環境を整えるようにしております。

課題と展望

加賀市には公的な病院が三病院あります。その中で、市開設の病院は当院と山中温泉医療センターで、平成二十八

年度には二病院を統合して、三百床の病院として生まれ変わります。現在、急ピッチで作業しております。ますます、医師が必要になりますので、今から、医師確保に向け努力しておりますが、同時に、地域の医師会と今までにない強い連携を模索しております。コンセプトは予防、医療、介護を継続的に医療者全員と市民が協力する地域作りです。同窓会の先生で、新しい病院と一緒に地域医療を作ろうとの志のある先生のご連絡をお待ちしています。

(院長 小林 武嗣 記)



病院紹介

富山市民病院

はじめに

まず、当院の沿革を説明します。昭和二十二年に富山市民病院設置が決定され、昭和二十一年から大手町で診療を開始しました。昭和二十九年には富山市五福に分院を開設しています。昭和五十八年には本院と分院を統合して現在の今泉の地に新築移転しました。ヘリポートや太陽光発電パネルを備え一患者一カルテでカルテ搬送システムが稼働する当時としては最先端の病院でした。その後医療ニーズの変化にこたえられるように、外来診療棟・救急センター・透視センターの増築や病棟の改修などを行って現在に至っています。

三つの目標

当院は、平成十七年に「私たちは医療を通して皆様の健康を守り、豊かな地域作りに貢献します」をミッション、「地域医療のリーダー病院になる」をビジョンと定め、一、地域から最も信頼される病院、二、地域医療の質向上を牽引する病院、三、地域医療情報ネットワーク構築の中心的役割を担う病院の三つを目標に掲げました。

一、地域から最も信頼される病院であるために

平成七年から三十床の開放病床を富山市医師会と共同運用するなど、当院は元々地域医療連携を強く意識していました。平成十九年にはそれまでの地域医療

連携室や相談室を「ふれあい地域医療センター」として統合拡充して、さらに地域医療連携を進めました。その結果、平成二十年には富山県で初の地域医療支援病院に認定されました。また、地域がん診療連携拠点病院として平成二十年に緩和ケア病棟や「がん・何でも相談室」を開設、第二種感染症指定医療機関として平成二十一年には新型インフルエンザ(H1N1)に対応しました。他には、地域災害医療センターとしてD・M・A・Tを整備し、富山地域広域リハビリテーション支援センターとして中部厚生センターや富山市保健所と連携してリハビリテーション実施機関へ支援活動を行っています。

二、地域医療の質向上を牽引する病院であるために

地域医療支援病院の要件の中には「地域の医療従事者に対する資質向上の研修を実施すること」という項目があります。当院の目標と合致する項目であり力を入れている点です。病院内外で積極的に研修・講習を行った結果、平成二十二年度はのべ四、四七九人の地域医療機関の職員への研修を行えました。

三、地域医療情報ネットワーク構築の中心的役割を担う病院であるために

平成十八年一月から入院外来同時に電子カルテを導入して紙カルテを廃止し、同年度に地域医療機関と病院を電子ネットワークで結ぶ「たてやま医療連携ネットワーク」を稼働しました。本システムの機能の概要は、①予約申込、②文書作成支援機能、③秘匿メール機能、④掲示板、⑤電子カルテ参照があり、患者さんの同意を得ることにより地域医療機関から当院

の電子カルテを閲覧することができました。本システムで採用しているオンデマンドVPNルータは、ICカード技術を応用した機器認証を利用し、接続の都度相手を確認して接続を許可する方式を採用しています。したがって、他の基幹病院が同様の連携システムを構築する際には当院から貸与しているルータを利用してもらうことが可能であり診療所の負担が軽減できると考えています。現在三十七の医療機関と連携ネットワークを組んでいます。システムの更新を富山市医師会と協議しているところです。

最近の動き

金沢大学の金子周一教授を委員長にお迎えして策定した経営改善計画が平成二十一年から三年計画で始まり、平成二十二年には六年ぶりの経常収支の黒字化を達成し、平成二十三年度も黒字の見込みです。計画の中に地方公営企業法の全部適用(全適)があり、平成二十三年四月から泉病院長が富山市民病院事業管理者に就任して院長を併任しています。また、同年十月から富山市・医師会急患センターが当院敷地内に新築移転し、放射線検査(CTは読影無し)と血液検査を当院で受託しています。急患センターの機能強化により、二次輪番病院を受診する一次

救急相当の軽症患者さんが減ってきています。危惧されていた二次輪番体制の崩れは起こらず順調に推移しています。

最後に

富山市民病院は「地域をひとつの病院に」のコンセプトで豊かな社会作りに貢献していきますので今後ともご支援よろしくお願いいたします。

(院長 石田 陽一 記)

〔編集委員会追記〕石田陽一先生(昭和五十四年卒業)は、平成二十四年四月より院長にご就任されました。



血管分子生理学

(旧第一生理学)

教室だより

前回、二〇〇五年に教室紹介記が本欄に載りましたので、今回はそれ以後の「教室近況」をご報告させていただきます。まず、教室人事として、二〇〇六年に杉本直俊講師の准教授昇進及び多久和典子助手の石川県立看護大学教授への転出、二〇〇七年に香川大学医学部から岡本安雄准教授が着任しました。現在、吉岡和晃助教とあわせて教員四名、事務補佐員廣瀬智恵美さんのスタッフで、学部学生教育、大学院教育・研究にあつています。多久和教授着任以来これまでに、医科学修士課程八名、他教室との共同研究を含めて医学系研究科博士課程十一名の研究を指導し、学位が授与されました。現在も、修士課程一名、博士課程五名の大学院生が研究を行っています。また数名の医学類学生も講義・実習の合間を縫って研究に参加しています。

教室の主要な研究テーマは、「細胞内シグナル伝達機構」にフォーカスした『血管の分子生理学・病理生理学』です。具体的には以下の二つの研究、(1)脂質メデイエーターズフィンゴシン・セリン酸(S1P)とその受容体ファミリーの生理的・病理生理的意義の解明、(2)脂質リン酸化酵素ホスファチジルイノシトール3-キナーゼクラスIIαアイソフォーム(P13K/C2α)の生理機能・病態生理機能の解明、に取り組んでいます。

S1P研究：一九九三年に、私たちがリガンド不明のオーファン受容体として遺伝子クローニングし、論文発表していたGタンパク質共役型受容体(GPCR)(大動脈平滑筋からクローニングしたことになんで、ACR16と命名しました)及びこれと50%のホモロジーを有するEDG1の両受容体とともにS1P特異的な受容体であることを、一九九八―一九九九年に世界の三グループと同時に発見し、情報伝達機構を解明しました。S1Pは細胞内においてスフィンゴミエリンやセラミドなどのスフィンゴ脂質から生成する脂質であり、元来、スフィンゴ脂質の一つの中間代謝物と認識されてきました。しかし、一九九一年ごろから、S1Pは細胞外から作用を及ぼすメデイエーター活性を有することが報告されはじめ、一九九〇年代末に上述の私たちの発見につながったのです。その後三種のS1P受容体が新たに発見されて、現在S1P受容体は五種類存在することが確立しました。御存知のように、脂質メデイエーターとしてはプロスタグランディンが有名であり、非ステロイド性抗炎症薬(NSAID)の薬理作用はプロスタグランディン合成酵素の抑制です。S1Pはプロスタグランディンとともに広義の脂質メデイエーターを構成し、今や第二のプロスタグランディンと呼ばれています。受容体発見当初の細胞レベルでの作用、受容体遺伝子ノックアウトマウス解析による発生における役割の解明を経て、現在、さまざまな疾患の病態生理的役割とS1Pを標的とした治療開発を目指した研究が活発におこなわれ、PubMedで調べるとS1P関連の研究論文はうなぎのぼりに増加しています。私たちの研究

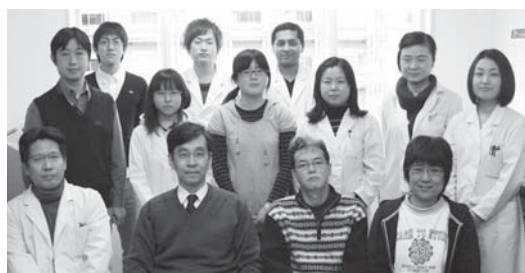
室では、S1P受容体(S1P1、S1P2、S1P3)、S1P生成酵素スフィンゴシンキナーゼ(SphK)、S1P分解酵素S1Pリアーゼの遺伝子改変マウスを種々作成し、S1Pの情報伝達系の動物個体における生理機能と病態生理機能(血管障害、心肥大・線維化、癌)および治療への応用(虚血後血管新生や腫瘍血管新生などを標的とした創薬)について研究を行っています。最近の研究成果としては、岡本准教授が中心となって、虚血モデルにおいてS1P徐放化製剤の虚血肢持続投与が血管新生を促進し、組織浮腫の副作用を伴わないで虚血後の血流回復を改善することを初めて明らかにしました。また、多久和典子助手らはSphK1トランスジェニックマウスが虚血後の血管新生反応の亢進を呈すること及び加齢に伴い、心肥大を伴わない心筋線維化を発症することを見出しました。さらにS1P2受容体ノックアウトマウスへの移植腫瘍実験から、内皮細胞および骨髄細胞のS1P2が腫瘍血管新生に抑制的に働くことを明らかにしました。

P13K/C2α研究：P13K/C2α研究は、多久和教授のライフワークである一九八〇年代からの平滑筋収縮機構研究に遡ります。一九九〇年代半ばに、当研究室は世界に先駆けて、低分子量Gタンパク質Rhoがミオシン軽鎖ホスファターゼ(MLCp)を抑制する結果、ミオシン軽鎖リン酸化レベルを増加させて収縮を増強すること(Ca²⁺感受性増加)を明らかにし、この発見は今日のRho/Rhoキナーゼ研究隆盛の嚆矢となりました。細胞では一般にRhoはGPCR三量体GタンパクG12/13を介して活性化されます

が、この経路とは別にCa²⁺がRhoを活性化することを発見しました。吉岡助教らが中心となり、それまで哺乳類において機能が不明であったクラスII型P33αに属するP33α/C2αが、平滑筋においてCa²⁺によるRho活性化に必須であることを発見しました。さらに、岡本准教授らは、この新しいRho活性化経路が自然発症高血圧ラット(SHR)の高血圧発症に関わっていることを明らかにしました。また、吉岡助教らはノックアウトマウスの解析から、P13K/C2αが血管収縮以外の重要な血管形成や血管恒常性維持において重要な役割を有することを見出しました。その他、最近、第一外科との共同研究で、Rhoキナーゼ阻害剤ファスジルがヒト橈骨動脈に対して非常に強い動脈弛緩作用を示し、冠動脈バイパス術において動脈攣縮予防に優れた有用な薬剤であることを明らかにしています。

当教室では、得られた基礎的な成果を心血管疾患や腫瘍などに適用して、最終的には新しい治療戦略や薬物の開発に結び付けることを目指しております。今後とも同窓会員の皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

(岡本安雄、多久和陽 記)



血管発生発達学

(小児科学)

沿革…小児科学教室は、大正三年(一九一四年)二月に林篤が初代教授となり、これを教室の始まりとしています。従って小児科学教室は、二年後に百周年を迎えることとなります。この間、重症患者を担当すれば病棟に何日も張り付いて治療に当たる教室の伝統を守る一方、臨床の中から発見した疑問を研究に繋げる physician scientist の養成にも力を注いできました。綿々と繋がる教室の歴史は記念誌に詳しく記載されていますので、ぜひ一読下さい。

現在の活動…現在の教室の活動は、免疫・アレルギー、血液・腫瘍、腎臓・膠原病、神経・発達・遺伝、循環器・蘇生・集中治療、新生児・周産期、内分泌・代謝の各グループに分かれ、それぞれ精力的にかつ連携しながら診療、研究に携わっています。各グループの主な活動は次の通りです。

免疫・アレルギー…谷内江教授、和田講師、東馬助教を中心に腸管アレルギーの発症病態、EBV関連リンパ増殖症におけるT細胞活性化機構、原発性免疫不全症の遺伝子解析と病態評価、H O-1による炎症制御治療の開発、難治性炎症疾患の病態解析など多岐にわたる研究がなされており、北陸に留まらず全国から患者様の相談が寄せられます。特に免疫不全の病態解析や新たな診断法の開発での業績は目覚ましく、高い評価を得ています。またご紹介

いただいた多数の地中海熱患者の解析から、MEFV遺伝子のミスセンス変異以外のバリエーションが炎症制御異常を引き起こし得ることを初めて明らかにした報告 (Mod Rheumatol) は千田の学位論文となりました。MEFV遺伝子異常は従来の概念を超え、多様な炎症病態を修飾する可能性があり、さらなる包括的な検討を進めているところです。またベトナムより留学中のVu Van Quang 先生は、Complete DiGeorge症候群における末梢血ならびに皮膚浸潤T細胞の特徴を解析しています。また北京児童病院から Chunyan Liu 先生が短期留学されてEBV感染細胞の解析方法を習得され帰国しました。国際共同研究はまだ緒に付いたばかりですが、その進展が期待されます。

血液・腫瘍…西村講師を中心に北陸における血液疾患診療の中心として、白血病に対する血液幹細胞移植を精力的に施行し、優れた成績を上げています。一方、さらなる成績の向上と移植治療の新たな展開を目指してマウスモデルを用いた移植後合併症/GVHDの病態解析を行っています。その成果のひとつである制御性樹状細胞の大量培養法と移植におけるそのメカニズムの解析(前馬)や、移植患者様の臨床検体を用いた解析(黒田(梨))を米国血液学会、日本血液学会等で発表し、国内外で注目を浴びています。腎臓・膠原病…清水助教を中心に難治性腎疾患に対する透析、免疫抑制療法、血液浄化療法などの臨床に力を注いでいます。研究面では、横山が、ロタウイルスによる腎障害に関する検討を積み重ね、Clinical Microbiology and Infection 等に発表し、この一連の成果が評価さ

れ、二〇一一年のアジア小児腎臓病学会 Young Investigator Awardを受賞しました。また、同学会では、井上(な)が、Excellent Posterに選ばれるなど目覚ましい活躍を挙げています。

神経・発達・遺伝…新井田特任准教授(子どものこころの診療科)、黒田(文)助教を中心に難治性神経疾患、遺伝性疾患に対する診療に熱心に取り組んでいます。また、「子どものこころの診療科」と共同で、発達障害に対する学際的アプローチが試みられています。あらたな遺伝学的スクリーニング法の開発に取り組む一方、近年増加しつつある小児神経学を専門に目指す若手医師育成に今まで以上に力を注いでいます。その一環として、昨年度より小児神経に関する基礎講義と、症例の持ち寄り検討会を行う「白山セミナー」を開催しています。興味のある方はぜひご参加下さい。

循環器・蘇生集中治療…太田准教授、斉藤助教を中心に先天性心疾患の診断と治療、特に胎児心エコーとカテーテル治療が重要な臨床テーマとなっています。研究面では心筋症の早期診断、心房中隔欠損症の自然経過、川崎病動物モデルを用いた病態解析、血管リモデリング機構の解析に加え、小児蘇生・小児救急医学教育分野でも成果を上げつつあります。昨年度は前田がマウスの血管障害モデルを用いた血管リモデリング機構の解析(Behavioir International)で学位を取得しました。また中山特任助教が集中治療部専任として従事し、小児重症患者の最後の砦として重責に耐えながら活躍しています。

新生児・周産期…井上講師(周産母子センター)、三谷特任助教(同)、小幡特

任助教(同)を中心に超低出生体重児などのハイリスク新生児の診療に全力が捧げられています。特に、後遺障害を持たない、infect survivalを目指して献身的な努力が続けられ、その成績は全国でもトップクラスです。また橋田を中心に胎児心エコーに積極的に関わり、胎児管理に役立てています。

内分泌・代謝…笠原保健学科教授、岡島助教を中心に主として若年性糖尿病などの内分泌疾患や成長障害の診療を中心に活動しています。最近では、周生期や移植前後に起こる、これまで明らかにされていなかった内分泌学的変動についてメスを入れることを課題としており、成果をおさめつつあります。

小児科はそのカバールする範囲が広くマインパワー不足は否めませんが、熱意とチームワークで補い、「小児科の先生に診てもらいたい」という無邪気な信頼に応えるべく、伝統に安住することなく日々邁進したいと思っています。(太田 邦雄 記)



支部だより

三重支部

平成二十三年度十全同窓会三重支部会
総会は、平成二十四年二月十二日（日）
に津市内で行われました。本年度総会に
は十三人の会員が出席しました。

三重支部では、水本龍二先生（昭和
三十年卒業）に二十四年間支部長をお願
いしておりましたが、今回、支部長が原
田資先生（昭和四十六年卒業）に交代と
なりました。黒川義博先生（平成十九年
卒業）と春木祐司先生（平成十七年卒業）
を幹事に加えることも承認されました。

愛知支部からご提案を頂いた、「三県
合同の十全同窓会連絡協議会の設立」に
ついては、協議会に参加して連絡を取り
合う方向を確認しました。同様に、「全



学同窓会東海支部総会…仮称「兼六会」
についても、愛知県支部総会に代表者が
参加し、連絡を取り合うが、兼六会参加
は各自自由参加とする方針を確認しまし
た。

今年度から、近藤峰生先生（平成三年
卒業）と伊藤健太郎先生（平成十九年卒
業）が新しく会員に加わりました。平
成二十三年度時点で、三重支部会員は
二十九名です。

その後、懇親会に移りました。懇親会
も和やかな雰囲気の中に終わり、閉会
となりました。

文責…十全同窓会 三重県支部

山門亨一郎（昭和六十二年卒業）

沖縄支部

去る平成二十四年二月二十五日（土）
にホテル日航那覇グランドキャッスルに
て平成二十四年度の十全同窓会沖縄県支
部総会が開催されました。当日はあい
にくの雨模様となり、またホテルの結婚式
とも重なり、開始時間が少し遅れました
が、例年より多い総勢二十名にご参集い
ただきました。北海道から二十数年ぶり
に帰郷された喜屋武元先生（昭和四十六
年卒業）、昨年富山県から沖縄県に移住
し、大浦クリニク（院長は前沖縄県支
部長大浦 孝先生）の副院長となられた
楠 憲夫先生（昭和四十七年卒業）、沖
縄県立中部病院で新進気鋭の腎臓内科の
若手医師として活躍中の末田善彦先生
（平成十七年卒業）、金沢市出身で在沖米
国海軍病院でイン턴として研修中の
荒木大祐先生（平成二十一年卒業）が今
年あらたに出席者に加わりました。沖縄



県支部会員数は若干増えて総数四十五名
になりました。また、昨年の支部総会で、
沖縄県支部長は、長年ご活躍いただきま
した大浦 孝（昭和四十六年卒業）先生
から上原 元（昭和五十年卒業）にバト
ンタッチされました。

十全同窓会の会務報告の後、今回は本
部より金子周一教授をお招きして特別講
演を賜りました。新装なった大学病院の

近況報告のあと本題に移り、ご専門の遺
伝子解析の手法を用いたガン検出方法な
ど世界の最先端を走っているお仕事につ
いてわかりやすくお話しいただきました。
ご自身の体験をふまえたご講演は大変
説得力があり、出席者一同深い感銘を
受けました。その後懇親会に移り、談論
風発、にぎやかな時間を過ごし、最後は
四高寮歌を全員で高らかに歌い上げて中
締めとなりました。ご講演の余韻が続い
ていたせいか、例年ですと四・五名しか
参加しない二次会に十名も残り、金子教
授を囲んだお話に遅くまで花が咲まし
た。

（上原 元 記）

写真説明（敬称略）

前列左より、知名 保（昭和四十七年卒
業）、伊是名博之（昭和四十九年卒業）、
安里 公（昭和四十八年卒業）、大浦
孝（昭和四十六年卒業）、知念 弘（昭
和五十七年卒業）、金子周一教授、上原
元（昭和五十年卒業）、山城則亮（昭
和三十一年卒業）、喜屋武 元（昭和
四十六年卒業）、国吉光雄（昭和四十六
年卒業）、後列左より、上原茂弘（昭和
五十年卒業）、伊波久光（昭和五十三年
卒業）、外間政利（昭和五十三年卒業）、
仲里博彦（昭和五十二年卒業）、荒木大
祐（平成二十一年卒業）、楠憲夫（昭和
四十七年卒業）、浜端宏英（昭和六十年
卒業）、末田善彦（平成十七年卒業）、崎
山慧史（昭和五十三年卒業）、大城康彦（昭
和四十八年卒業）

医学部百五十年史のための覚え書【34】

明治大正両天皇臨幸記念碑文について

赤祖父 一知

平成二十三年（二〇一一）十一月六日に「金沢医学館跡地」の石碑が金沢大学医学部創立百五十周年の記念事業として、大手町金沢総合健康センター東館（二階・金沢市医師会）の西前庭道路側に建立された。

以前この金沢市医師会の旧敷地には、明治大正両陛下が北陸巡幸のときに大手町にあった医学学校（金沢大学医学部の前身）に御来駕されたことを記念して、昭和五年（一九三〇）に五段の階段状台石を有する大きな円柱状の石碑（碑碣）が建てられた



図1 円形基礎台座石の上に建つ
明治大正両天皇臨幸記念碑（昭和五年建立）
〔「金沢市医師会医政史」 昭和十八年より〕



図2 平成十七年現在地に移転された碑碣
（平成二十四年現在）

（図1）。この記念の碑碣は、昭和四十四年（一九六九）に石川県医師会館が新築落成したとき、会館前の道路側西庭地に、平成十七年（二〇〇五）に金沢市が健康プラザ大手町東館を開館したとき、さらに会館前敷地の東端に移築された（図2）。

今回改めて、現存の御臨幸記念石碑の碑銘文（図3）について再調査したので報告する。

明治天皇 臨幸記念碑 大正天皇

城北門外有松數株儼立蓋地是爲本市醫藥發祥之地按明治十一年 天皇北巡枉駕輿於金澤醫學所 大正天皇在儲行啓亦駐駕於茲其趾即此地也抑醫學所明治三年藩主慶寧公所創設初稱醫學館後改金澤醫學專門學校尋移於城東大正十二年陸爲醫科大學并置藥學專門部嗟乎創建以來多士濟濟松風護謨往來瞻仰共承共榮終致今日之隆昌其萌實矣於兩 天皇及藩主之洪澤矣昭和三年 今上即位乃建醫師會堂於松下立石以表 聖蹟請余記之余亦爲會員不得以名文辭乃舉其槩使後人更起夙夜報効之念云
昭和五年庚午冬十一月
醫學博士 高安右人謹撰

右のように銘は漢文で記されている

が、次のような「書下し文」がかつて市医師会に保存されていたので、そのまま紹介する。

城北門（河北門）の外に数株の松が立ち並んでいる、この地が金沢市における医学の発祥の地である。考えてみると、明治十一年明治天皇北陸行幸のおり金沢医学所を見学し、大正天皇行幸のおり休まれた跡が、即ちこの地である。医学所は、明治三年藩主慶寧（十四代前田慶寧）が創設したものである。始め医学館と称し、後改め金沢医学専門学校となり城東（小立野）に移る。大正十二年金沢医科大学（金沢医学専門学校が昇格）及び附属の薬学専門部を置き、以来あおぎみ考えるに、今日にいたるまで榮え、隆昌したのは、天皇及び藩主の大きな恵みがあったからである。昭和三年昭和天皇即位の時医師会堂を建て、松下に碑を建て聖蹟を表し記す。会員に知らしめ、理解してもらうため、この言葉を挙げ、そのあらましを後人に伝えるため示しておく。



図3 記念碑の碑銘文

十全昔話

我が青春

九谷 修 (昭和二十五年卒業)

私は、昭和十九年三月二十二日、太平洋戦争の真最中に、海軍兵学校を卒業して海軍士官となった。私達のクラスは艦船部隊、航空部隊に分かれてそれぞれの任務につき、私は艦船組で、少尉、中尉と昇進し、戦争が終わる迄の一年五ヶ月の間に、クラスの約三分の一が戦場で散っていった。花も蕾の弱冠二十歳から二十二歳というところであった。彼等ひとりひとりの真剣な顔、笑った顔などが、それから六十数年たった今でさえ、昨日今日のこのように鮮やかに浮かんでくる。日本海軍の命運を決めた、マリアナ沖海戦、レイテ沖海戦に参加したので、体験の一部を残したいと思う。

昭和十九年四月呉軍港より戦艦「大和」に便乗し、海路シンガポールの南、リンガ泊地に到着、戦艦「榛名」乗組になり、機銃群指揮官として猛烈極まる訓練に励んだ。リンガ泊地は、シンガポールから南へ約一三〇カイリ、スマトラの東岸にあり、外周は大小の島々で囲まれ、南北約五〇マイル、東西約三〇マイルで、海底は平坦、どこでも投錨が可能である。最も有利な条件はパレンバンという無尽蔵の油田地帯が近くに控えているので、燃料のために頭を使う必要もなく、思う存分訓練ができるということである。

小澤治三郎中尉の率いる第一機動部隊で、「天鳳」「瑞鶴」「翔鶴」の正式空母、「大和」「武蔵」を含む五隻の戦艦、六隻の軽空母など総勢五十五隻の艦艇で構成されていた。米軍が六月十五日サイパン島に上陸、

直ちに「あ号」作戦が発動され、サイパン島西方海域で十九、二十日の両日、日米両軍がミッドウェイ海戦以来二年ぶりに激突した。小澤長官が必勝を期し、全日本海軍が深く期待した航空機によるアウトレンジの作戦はミッチャー提督の率いる米五十八機動部隊によって鎧袖一觸、もろくも潰れたのであった。再起を期し、再び石油の豊富なりんガ泊地に赴き、昼夜を分かたぬ猛訓練が始まり、艦隊の練度も極めて向上した。

米軍は十月二十日、レイテ島に上陸を開始した。直ちに豊田副武連合艦隊長官より、捷一号作戦発動、尚第一遊撃部隊（栗田本隊）は二十一日早朝、豊田長官より二十五日黎明、タクロバンに突入し、敵の攻略部隊をせん滅すべき命令を受領した。

海軍はこの作戦を最後の一戦と覚悟し、水上艦艇も航空母艦も潜水艦も基地航空部隊も、ありとあらゆる総兵力を動員した。アメリカ海軍もまた、全兵力をこれに集注してここを先途と戦った。戦場は南北千数百カイリ、東西一千カイリにわたり、四昼夜におよんで、潜水艦戦あり、航空戦あり、追撃戦あり、戦闘は連続行われ惨烈をきわめた。

さらに本作戦は、海上戦闘の定石たる両軍主力の洋上決戦にあらずして、局地に在る敵輸送船団撃破を目的とした大艦隊の特攻作戦であったため、いっそう作戦の内容は複雑煩瑣なものになったのである。かくて戦場の常として、敵にも味方にも色々の錯誤、誤観測、誤判断等が入り乱れての戦闘であった。

十月二十二日、リンガよりブルネイに進出していた栗田艦隊は西村部隊と分かれてレイテ湾に向け出撃した。

栗田艦隊は翌二十三日、パラワン水道において敵潜水艦の襲撃を受け、旗艦「愛宕」沈没、「高雄」航行不能となった。またもや敵潜の魚雷四本が「摩耶」に命中し、同艦は数分にして爆沈した。旗艦を戦艦「大和」に移して作戦を継続した。

二十四日未明にはミンドロ島の南方を迂回して〇六三〇以後二六ノット即時待機としてシブヤン海に進出した。

この日の天候晴、海上は油を流したように静穏であった。

一〇〇〇頃から電探は確実に敵を捕捉し、しきりに東方より敵機大編隊の近接を報じ、一〇二五には約三〇機の母艦機の一群を発見、まもなく敵機は攻撃に転じ、肉薄殺到してきた。輪形陣の全砲火は一斉に大蓋を切り、たちまち修羅場と化した。大小の各種砲より打ち出す無数の砲弾は空中高く炸裂して一面に黒点を印し、数千挺の機銃は間断なく発射されて、弾丸雨霞のごとく、殷々轟々耳も響せんばかりである。敵機動部隊より終日のべ約三〇〇機、五次にわたる猛烈きわまる航空攻撃を受けた。

戦艦「武蔵」を攻撃した敵艦上機の数は一五〇機以上で、これによって魚雷二〇本以上、爆弾一七個以上命中し、至近弾二〇個以上を受け、最後の空襲終了後四時間四十五分を経過してから沈没した。

二十五日〇三〇、無事サンベルナルジノ海峡を通過、夜間索敵配備をつくり、速力二〇ノットで三三〇〇まで東進、敵を搜索、それより南東に変針、レイテ湾突入を期しつつ、サマール島に沿って南下した。

二十五日、日出〇六二七、風向東北東、風力五〜八メートル、海上やや白浪あり、〇六四五突如、南東方はるか水平線に数

本のマストを発見した。この時の旗艦「大和」の位置、スルアン灯台の三五七度六〇カイリであった。マストに引きつづいて飛行甲板が見えてきた。飛行機が連続着艦している。

「大和」はただちに増速、敵方に向首し、敵空母に対し距離三キロ、前部砲塔二八インチ砲で射撃開始し、つづいて第三戦隊もまた敵空母に対し砲戦に加入した。間もなく栗田長官は第五、第七巡洋艦戦隊に突撃を令した。敵は始め東ついで南、つづいて南西と次第に内圏を描いて退却、その間煤煙幕やスクールを利用して艀晦に努め、また間断なく飛行機の雷爆、巡洋艦等の魚雷攻撃を行ない、わが方の追撃を阻止妨害した。これに対し、わが方は、第五、第七戦隊の重巡を先頭に、「金剛」「榛名」の高速戦艦これにつぎ、第一戦隊の「大和」「長門」これにつづき、各隊各艦猛進また猛進につぐ追撃をもってすること二時間におよんだが、主としてスクールと保有燃料の関係でこれを断念、レイテ湾に向かった。北方約一〇〇カイリに敵機動部隊出現の報告を得たので、レイテ湾突入を断念して、これと決戦せんと北上した。敵機動部隊との遭遇接觸はついに起こらず、同夜再びサンベルナルジノ海峡を通過して帰途についた。

西村部隊は、レイテ湾に突入奮戦したが、駆逐艦一隻のほか全滅し、戦艦二隻、重巡一隻、駆逐艦三隻を失った。栗田艦隊の追撃戦中止後、神風特攻隊が初の攻撃に奏功し、敵空母一隻を沈めた。最優目的としたレイテ湾突入も、敵機動部隊との決戦も、いずれも生起しなかった。そしてわが連合艦隊は名実ともに全面的に崩壊し、再び起つことは出来なかった。

私の医師としての体験

水村 泰治 (昭和三十五年卒業)

私は昭和三十五年（一九六〇年）に金沢大学を卒業し、国立東京第二病院（現、東京医療センター）でインターンをした後、金沢大学第一内科（武内内科）に入局し、一九六五年に大学院修了後、一九六八年一月から二年間、バーマン教授のいる米国ケンタッキー州ルイビル大学内科に内科レジデントとして、さらにもう一年間クリーブランドのマウントサイナイ病院で腎臓内科のレジデントとして、臨床の場で働く経験をしました。米国での体験とその後の日本での経験を中心に少しお話ししたいと思います。

米国の病院と日本の病院との大きな違いは救急室（ER）です。ERは二十四時間開いており、急変した患者はもちろん、すべての新患患者がERにやってきます（ただし、小児は隣にある小児専門病院に行き、精神科も別の施設にありました）。その他の全ての科の患者を、内科か外科系のレジデント一人とインターン一人に加え学生二、三人で見ることになっていました。もちろん、入院が必要な患者や難しい患者には専門のレジデントを呼ぶことができますが、まだ入院させなくてもよい患者はERで診察して適当な科の再来を予約して帰します。内科や外科を主体に多くの患者が来ましたが、一番困ったのは出産間際の妊婦でした。破水していたら入院させ、していなかったら家に帰すのですが、その診断には自信がありませんでしたので苦勞しました。

した。ERの勤務は二年間で一月でしたが、一日十二時間勤務で夜間も続いており、かなり激務でした。内科の勤務に戻っても内科の患者のことでERから呼ばれることはしょっちゅうでした。内科レジデントの一年目は主に病棟勤務ですが、学生が配属になるのでその教育も重要な仕事のひとつになっていました。私のいた病院の内科の病棟は四つあり、病院のCPCがある場合には、その病棟に配属になった学生の意見をまとめて発表しなければならず、学生達とも親しくなりました。米国の医学生は高校卒業後、カレッジを修了して医科大学に入ってくるので、日本の医学生より年をとっており、大半が結婚していました。時には、ピルの処方をお願いして困ったこともありました。

内科レジデントの二年目はサブスペシャリティを選択することができ、私は循環器、呼吸器、神経内科、腎臓内科を取りました。この間にもERのコンサルトが当たっていました。いろいろな興味ある症例が多くありましたが、もっとも印象に残ったのは髄膜炎菌による髄膜炎の患者さんです。ERで病歴を取っている間に眠りだし、こん睡状態になり、髄液のグラム染色で陰性球菌がみつかり、培養で髄膜炎菌が検出されました。ペニシリンの大量療法で全快しました。このような症例は日本ではめったに見られませんが、米国では珍しい事ではないと言われました。

私を呼んでくれたバーマン教授がクリーブランドのマウントサイナイ病院に転勤になったので、お願いしてその腎臓内科のレジデントとして採用してもら

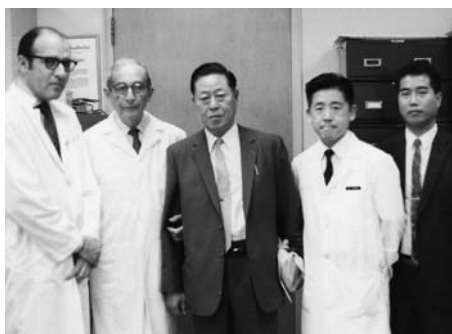
いました。そこには、レニンで有名なゴールドブラッド先生がおられ、八十歳を過ぎていましたが、まだ実験をしておられました。日本から高血圧を研究している先生が多く見学に來られました。村上元孝第二内科教授も來られ、ゴールドブラッド先生と親しく歓談されていました。私はそこでは主に腎臓、透析、腎移植の患者を診ていました。特に腎移植になると、一晩寝ずに電解質の管理をしていました。ちょうどその頃、クリーブランドクリニックでHLA適合性の検査が出来るようになり、われわれの病院の患者もその恩恵に預かりました。私が当直の時、死体腎の適合がわれわれの病院の患者にあたり、その人に連絡がつかず、困って警察に探して連れて来てくれるように頼んだら、早く探して連れて来てくれました。その時はなんと頼みがいのある警察だろうと思いました。因みに米国では救急車は警察の管理で、ERと警察は持ちつ持たれつの関係なのかもしれません。私はこちらで一年三か月お世話になり帰国しました。

その後、私は金沢大学第一内科から新設の富山医科薬科大学第二内科に移り主に腎臓内科を担当しました。腎臓内科の講義を一年した後には急きょ神経内科の講義もしなければならなくなり、腎臓内科をしながら神経内科の授業をし、病院の神経内科の患者を見たり、神経疾患のカンファレンスに出ることは大変でしたが、このことが後に大変役に立ちました。

昭和六十一年四月から埼玉県上尾市の上尾中央総合病院に移り、神経疾患も内科で見っていました。最も印象に残ったの

は着任後しばらくして回診で見つけたギランバレー症候群の若い患者でした。当時まだ保険で認められていなかった血漿交換を行い救命しました。七、八年後にそのお母さんに会った時大変感謝されました。また血尿、意識障害、血小板減少で来た患者にTTP（血栓性血小板減少性紫斑病）と診断し、血漿交換などをしましたが心不全で亡くなり、親戚に外科の医師がおられ、剖検をさせていただきました。剖検の結果を送ってほしいと言われ診断が当たっていたのでほんととした経験もあります。定年後は同病院のサテライトクリニックで透析患者を主に見ています。三年程前に透析患者のPTH（副甲状腺ホルモン）に面白い現象が見られ、ドイツの腎臓の専門誌に発表しました。現在は後期高齢に手が届きましたが、臨床を続けるかぎり世の中の医学に遅れない様にと思っています。

ここまで主に、私の体験や印象に残った症例について書きましたが、学生諸君や若い医師の皆さんに私の体験談が少しでも参考になれば幸いです。



写真：左よりバーマン教授、ゴールドブラッド先生、村上教授、小生

学生コーナー

『中年老い易く
学更に成り難し』

水野 隆史

平成二十二年度に学士編入学して四月から五年生になった水野です。

学士編入は、ご承知かと思いますが、大学を卒業した学士を対象とした編入制度（金沢大学では定員五人で、三年生に編入。ただし、平成二十三・四年度入学からは二年生に編入）です。現在、医学部のある大学の半分ほどで行われています。ちなみにアメリカでは、一旦通常の大学を卒業してから「メディカルスクール（職業訓練学校としての医学校）」に入学する仕組みになっているそうです。さて、そういう仕組みであるため、学士編入生は一般入学者より二歳以上年長者ということになります。そんな中で実は私は、他大学を含めた学士編入者の中ではおそらくダントツの最年長、五十五歳で入学しました。

前職は、農林水産省職員、いわゆる官僚です。東大農学部を卒業後、農水省に入省して以来、一貫して行政官として約三十年を過ごしてきました。最近は変わってきましたが、私が入省した頃は行政官はだいたい五十歳前後でほとんどの人は肩たたきされ退職し民間企業等へ再就職（マスコミで取り上げられるような優雅な天下りとはほど遠いものです）が」というのが普通でした。私はずっとそんな先輩たちを見てきたので、五十歳になったら自分の意志で退職して、くだらない天下りなどせずに自分の新しい道を切り開いて行こうと思っていました。

しかし、仕事に追われる毎日の中で、時はあつという間に過ぎて、いつの間にか五十歳になっていました。このままではいけないと思い、やりがいいあつて人の為になること、自分にできることは何だろうといういろいろ考えました。ちょうどその頃、偶然にも、五十五歳で秋田大学医学部に一般入学して六十何歳かで研修医をしている女性の記事を新聞で見、医学への挑戦も可能であることを知り、ネット等でいろいろ調べました。そこで、四十代、五十代で一般入試で医学部に入っている人がいることや、三年生から入学できる学士編入学制度があるということを知りました。学士編入では教養課程を繰り返さずに四年で卒業できるため効率的（それに伴う大変さには気が付きませんでした）で、挑戦してみる価値があると思う、情報を収集し、勉強計画をたて、更にそれまでの生活パターンを大きく変えて、朝三・四時に早起きして勉強を始めました。こうして約三年間の悪戦苦闘の末、やつとの思いで金沢大学に入学させて頂きました。

しかし、本当の苦闘は入学後でした。現在の医学専門課程は二年生から始まっているため、学士編入生は、三年生のカリキュラムをこなしながら、同時に二年生のカリキュラムもこなす、両方の試験をクリアしていかなければなりません。当然、講義も実習も時間帯が重なっていることが多く、どうしても無理がでてきます。このため、講義が重なっているときは学生で分担して講義に出てノートをとったり、実習が重なっているときは一つの実習を終えてからもう一つの実習に行くなどで対応しました。先生方には時間外に

講義をしていただいたり、時間外に実習を行わせていただく等ご支援・ご配慮をいただきました。心から感謝しております。先生方から入学前のオリエンテーションの際にその厳しさは伺っていたので、ある程度は覚悟していたものの、予想以上の厳しさだったことは事実です。

午前中は三年生のスケッチ、午後は二年生のスケッチと一日中顕微鏡を覗いてスケッチをしなければならなかった数ヶ月間では、目の充血が治まらず数種類の目薬を買い求めたこともありました。私の場合はとにかく平日は疲れきつてほとんど勉強する時間が取れず、試験期間になると睡眠時間も三時間そこそこで必死に勉強したことが思い出されます。これまでの人生でこんなに集中して勉強したことはありませんでした。お陰さまで（）体重も減って、BMIも理想数値になりました。心配してくれる人達には、「勉強ダイエツトだ。」と強がってみせたりもしました。「二年上の学士の人達も試験期間になるとみるみる痩せてきていた」という話を同学年の一般入学生からも聞いたので、きっと先輩学士の人達も同じように苦労されてきたのだと思います。こうして何度か不時着しながらも低空飛行で三年生の基礎医学の試験を乗り越え、なんとか四年生になることができました。

四年生になると、今度は膨大な量の系統講義、臨床講義、そしてOSCE、CBTと怒濤のように試験が待っていました。三年生の一年間の厳しさに比べれば肉体的にも精神的にもそんなに苦にならず、低空飛行でしたが試験はなんとかクリアし、体重が減少することもあ

りませんでした（今は体重が減らず困っています）。

さて、こんなふうに入學以来約二年を経過した今、私が感じているのは「中年老い易く学更に成り難し」ということです。オリジナルの「少年老い易く学成り難し」は、月日が過ぎ去るのは思いのほか早い、学問はなかなか成し難い、だからこそ、時間を惜しんで学問に励まなければならぬというような意だと思いますが、中年になると、若い頃より脳力も衰え、残された時間は一層少なくなっており、学問は少年よりも更に成し難い。さらに、様々な疾患の好発年齢であるため、いつどんな病に倒れるかわからない。だからこそ、時間を惜しみ、もつともつと時間を大切にして学問に励みたい、という感じですが。

平均寿命五十歳くらいの江戸時代、伊能忠敬は五十歳で家業を引退し、江戸に出て天文学を学び、七十歳まで全国を歩き回り、世界レベルの日本地図を作り上げました。そして今や平均寿命が八十歳にも及ぼうとする時代になり、高齢者の活躍する場面も目立ってきました。百歳で現役医師の日野原重明先生、七十五歳でエベレスト登頂を果たした三浦雄一郎さん、七十一歳でロンドンオリンピックに出場する法華津寛さん、身近ではご近所の七十歳で仕事もトライアスロンも現役バリバリの日さんなど全国各地でたくさんの高齢の方々が活躍されています。これらの方々のご活躍を目標、励みにして、力を尽くし、医学・医療に少しでも貢献できればと思います。皆様方のご指導、ご鞭撻を賜れば幸いです。

医師国家試験結果

前医学部長・医学類長 井関尚一

第一〇六回医師国家試験における
 本学の合格率は新卒者、既卒者合わせて八十九・〇％であり、全国平均の九十二％を下回りました。大学別順位では全国八十校中五十五位、国立大学四十三校中二十九位であり、新卒者だけではさらに順位は低いものとなります。好成績に沸いた昨年の現象は一時的で、再び近年の低迷傾向に逆戻りした感があります。学部教育の責任者としてまことに面目ありません。

学業成績はその学年の個性と言えますが、今回受験後の学生たちの手応えは良かっただけに、新卒者に不合格が八名も出たのは意外でした。しかし不合格者の大部分は秋の統合卒業試験でも成績最下位グループにいたことは確かです。対策としては二通り考えられます。ひとつは高学年で大学側がいわゆる国試対策指導を積極的に行うこと、もうひとつは低学年の段階で進級判定を厳しく行い、成績不良学生を指導して勉学の習慣をつけさせることです。私としてはこの二年間後者の努力をして、少なくとも基礎医学科目においては定着してきたと思います。その効果が出る数年後を待ちたいところですが、早急に結果を出すために前者も行うべきというご意見は当然あると思います。

四年次末の共用テスト（CBTとOSCE）の前に基礎、臨床を含めた専門科目を一通り終わらせるカリキュラム前倒しが、今年度の二年生から進行します。

第106回医師国家試験結果

※（ ）内は第105回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成24年 3月卒業生	101名 (103名)	93名 (101名)	8名	92.1% (98.1%)	93.9% (90.2%)
平成23年 3月以前の 卒業生	8名 (13名)	4名 (7名)	4名	50.0% (53.8%)	60.0% (60.2%)
合 計	109名 (116名)	97名 (108名)	12名	89.0% (93.1%)	90.2% (89.3%)

先行措置として、今年度は四年生の授業の大部分を秋までに終わらせ、学生が共用テスト対策を行う時間を増やします。カリキュラム前倒しは、臨床実習時間を十分に確保するとともに医師国家試験対策の余裕も生み出すものだと思います。これとバランスを取るよう、学生の研究マインドを涵養するため、低学年から希望学生が課外時間を利用して基礎や臨床の研究室に席を置いて実験やセミナーに参加するMRT (medical research training) プログラムを今年度から開始します。卒業研修必修化以後に減少した医学部卒業生の大学院進学率を上昇させることにもつながると期待しています。

本学のミッションは、単に医師国家試験成績を上げることではなく、全国や世界で活躍する医師・医学研究者を育てることにあるの言うまでもありません。さねどなお、医師国家試験成績は軽視できないというのが頭の痛いところです。

謝恩会

三月二十二日金沢ニューグランドホテルに於いて本年度卒業生による謝恩会が執り行われました。昨年度の謝恩会は大震災の直後ということもあり、開催自体が危ぶまれたと伺っていましたが、今回滞りなく準備が進められたことは委員会として大変ありがたいことでした。

会には多くの先生方にご出席いただき、和やかな雰囲気の中、開会となりました。卒業生代表の土田哲也君のスピーチに続いて、中村信一学長、山本博学域長、富田



勝郎病院長からお言葉をいただき、富田先生の乾杯の音頭で宴会が始まりました。円卓を囲んでお世話になった先生と語り、またいらして下さった先生方お一人お一人の姿を拝見すると、難しかった試験のことや、さまざまな経験ができた実習での出来事が自然と思ひ出されました。会の後半にはスライド上映や卒業生有志によるバンド演奏などの余興があり、最後に井関尚一学部長の一本締めで盛況のもと終了いたしました。

私たち平成二十三年卒業生は歴史的な災害のあった翌年に医師として歩み始めました。困難な状況においてもそれを打開し、社会に貢献できるような人材になることを強く求められていると肌で感じています。金沢大学医学部で学び成長できたことに感謝と誇りを持って各々がそれぞれの場所で努力していく所存です。最後になりましたが、ご指導いただいた先生方、学校関係者の方々に改めて感謝し、御礼申し上げます。ありがとうございます。

(平成二十三年度謝恩会実行委員長

小沼 新記)

平成二十四年三月卒業生進路

赤羽 美香 金沢大学附属病院
 安済 達也 自治医科大学
 安藤 尚子 公立松任中央病院
 池田 敬至 横浜市立みなと赤十字病院
 出雲崎 晃
 市村 裕輝 金沢大学附属病院
 伊藤 拓也 東大阪市立総合病院
 井波真矢子 黒部市民病院

同窓会名簿改訂についてのお願い

本年度は十全同窓会名簿改訂を行います。

記載内容(住所や勤務先・役職等)に変更がある場合には、同封の「葉書」にて、十全同窓会事務局宛、またURL:<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member/index.html>にてお知らせ下さいますようお願い申し上げます。

締切日

平成二十四年六月三十日(土) 必着

連絡先

〒九二〇-八六四〇 金沢市宝町十三番一号
金沢大学医学部 十全同窓会名簿編集係
E-mail juzen@med.kanazawa-u.ac.jp
FAX 〇七六-二三四-四二〇八
TEL 〇七六-二六五-二二三三

十全同窓会名簿編集委員長 加藤 聖

変更届けがホームページ上で可能になりました。

URL: <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member/index.html>

juzen@med.kanazawa-u.ac.jp. The browser window shows Microsoft Internet Explorer."/>

十全同窓会のHPよりリンクできます。

編集委員長就任の挨拶

山本 健 前委員長の後をうけ、この第五百五十一号から編集委員長の任にあたり、これまで編集委員として中村、佐藤、山本博各編集委員のもとで努めて参りましたが、何分にもこうした方面の才が乏しく、編集委員の先生方、並びに読者である同窓生各位のご指導、ご助言を頂戴しながら、その責を全うしたいと思っております。

改めて申すまでもありませんが、同窓会報は母校と同窓生の間の大きな架け橋であり、母校と同窓生の連帯を象徴するものでありたいと考えております。来る七月七日には、医学部創立百五十周年記念式典・講演会が行われ、母校も次の創立二百周年にむかって新たな一歩を踏み出します。この会報においても、従来のスタイルを継承しながら、未来にむけた紙面作りを志向していきたいと考えております。会報と同窓会ホームページとの間の更に積極的・有機的な運用等、いくつかのアイデアが考えられますが、先輩方が育ててこられた伝統と歴史的意義を見失うことなく、読者が参加しやすい紙面をめざしたいと思っております。

末筆ながら、同窓生各位の益々のご健勝を祈念申し上げますとともに、これまで同様、会報へのご支援、ご協力の程をお願い申し上げます。

(編集委員長 大島 徹)

編集後記

とりわけ厳しく長かったこの冬の寒さでしたが、待ちわびた春がようやく訪れ、暖かな陽射しにほっとする頃となりました。会員の皆様方におかれましては益々ご活躍のことと存じます。

ここに会報一五〇号をお届け致します。本年度より井関尚一学域長、山本博研究科長、山本健医学類長の新体制がスタートし、附属病院は引き続き富田勝郎病院長、古川仰理事が就任されました。先生方の決意あふれるご挨拶に、今後のさらなる発展へのご尽力を願ってやみません。また、本会報も大島徹新編集長を迎え、一層皆様に親しまれる紙面作りを努めて参りたいと思っております。

晴れて四月から医師となられた卒業生の皆様、心からお祝いを申し上げます。医師国家試験成績結果報告からは時代の流れによる医学教育の変革とそれに伴う対策の難しさが十二分に感じられます。医師としてのスタート地点に立ったばかりの卒業生の皆様には、本会報に寄せられている、同窓会員の先生方の内外のご活躍をお手本として、医師となつてからの研鑽がいかに重要かということを感じ取って頂きたいものです。井関前医学類長からの「贈る言葉」には新卒業生の方々のみならず、年月が経過した会員諸氏におかれまして、ここに改めて身の引き締まる思いと共感を覚えるものではないでしょうか。

いよいよ医学部創立一五〇周年記念式典が迫って参りました。ぜひご参加下さい。記念事業については、進捗状況の報告ならびに加藤先生の論説に詳しくございます。次回の会報にて式典の様子を詳しくお伝えする予定でございます。

(編集委員 中西 清香)